
Imitation Life

ロム虫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Imitation Life

【Nコード】

N9613E

【作者名】

ロム虫

【あらすじ】

人形を生み出す魔術師セピア。その手によって生み出された人形、安奈。恋をした二人は、しかし運命によって引き裂かれていく――。

ブローグストーリー

私は眠っていたのか、急に意識が明瞭になった。瞼を開くと夕焼けの光が瞳に差し込む。

身体を起こして周囲を確認する。まだ動き難い身体を起き上がらせて周りを見回す。喫茶店のような飾り付けの部屋だ。道路に面した壁がガラス張りになっている。どうやらそこから太陽の光が入り込んでいるらしい。

目が光に慣れてくると、部屋の色がはっきりと分かるようになってくる。全体としては白が基調になっていて、照明はほとんど白いぐらいのオレンジ。随分と落ち着いた雰囲気 of 部屋だな、と感じる。「おはよう、あんな安奈」

誰かの声が聞こえた。私は何故かこの声の主を知っているような気がする、声の聞こえた方を向く。ちょうど真後ろに背の高い女性が立っている。風変わりな瀏の広い帽子を被っている。

「おはようございます、セピアさん」

私はその人の名前が、セピアだということを知っていた。さっきまで何も知らなかったのに、分からなかった問題が解けたときのように、ふっとその言葉が浮んでくる。

「やっと起きたのね。もう二時間も経ってるわよ？」

「そんなに、ですか？」

「ええ、とても長く眠っていたわ」

セピアさんはそう言い、壁に掛かっている時計を指差す。時刻は六時を少し過ぎた頃。

「迷惑でしたか？」

「大丈夫。どうせ今日は休業日だし」

私の隣にセピアさんが座る。そこで初めて、私はソファアのように並べられた椅子の上で眠っていたことに気がついた。

「紅茶でも飲む？」

セピアさんがそう尋ねる。途端に、この部屋がセピアさんの喫茶店の店内であることも思い出す。

「飲みたいですけど、喫茶店の品物じゃないですよね？」

念のために訊いておく。

「きちんと自腹で買った奴よ」

「じゃあ、頂きます」

「オッケー、今持ってくるわ」

入れてくる、ではなく持ってくる、なのだ。どうやらあらかじめ入っていたらしい。私が紅茶を飲む気分じゃなかったらどうするつもりだったのだろうか。

「どうぞ」

適当に考えているうちに、セピアさんは紅茶を持ってきた。店で使っているコップに入れて。

「……あの、セピアさん」

「なに？」

「紅茶だけじゃ物足りないです」

さすがに紅茶だけでは満足ならない。何か食べる物が欲しかった。

「じゃあ、クッキーでもどう？」

「店の物、ですよね？」

「そうだけど、安奈が買ってくれたら大丈夫よ」

そう言ったセピアさんの表情を見ると、私にクッキーを買わせる気満々の顔だった。断るとしつこそうだったので、

「分かりました。幾らですか？」

と簡単に折れてみせる。

「百五十円よ」

言葉に従い百五十円を取り出そうと、スカートのポケットに手を入れる。自分が学校の制服を着ていることに、このとき初めて気がつく。

財布をポケットから取り出して百五十円を取り出す。セピアさんにしっかりと手渡すと、

「消費税込み、百五十七円」

といまさらになつて言い加えられる。

「最初に言つてくださいよ」

文句を言いつつも、私はもう一度財布の中を見た。七円ちょうどは無かつたので、十円玉を一個取り出す。

「どうぞ。お釣り、下さいよね」

私は念を押すようにしつてセピアさんにお金を手渡した。

「分かつてるわよ」

笑顔で答えたセピアさん。けれど、三円が帰ってくるのはかなり後になりそうだった。

私が買ったクッキーを、セピアさんは後から持つて来た。紅茶は少し冷めてしまっているけれど、まだ充分おいしい温度だ。クッキーを食べながら、時々紅茶を口にする。私が買ったクッキーなのに、セピアさんの方がよっぽど食べている。それに、さつきから雑談をしているのだけれど、私はほとんど聞いているばかりだった。

さらに紅茶を口に含む。微かな波紋が広がり、香りはゆつたりと鼻を撫でる。喉に通す前にしっかり舌で味わうと、紅茶独特の心地よい味が沁みる。

「おいしいですね」

「え？ うん、まあ、おいしいわね」

突然の私の言葉に驚いたのか、セピアさんは変に慌てたような返事をした。

そのまま私達は無駄話をした。そんな中、私は目が覚める以前の記憶が無いことに気がつく。その上何も覚えていないのに、記憶が必要になった時に限って思い出す。

「——もう七時ね」

紅茶もクッキーもとづくに片付けてしまつてからしばらく後。セピアさんはそう言つて時計を見る。私も同じように時計を見してみると、言われたとおり七時を指している。正確に言つと、七時になる直前だった。

「そろそろ帰りなさい。もう暗いでしょ」

「はい」

私は軽く返事をした。そしてすこし残念に思いながら、椅子から腰を浮かせる。近くに私の学生カバンが置いていた。それを取ると自分のカバンには教科書とかそういった物が何もは言っていないことを思い出した。友達から借りてきた数冊のマンガと、筆箱だけ。家で勉強するつもりは無いけれど、筆箱は一応持ち帰ることにしている。

「暗いけれど、大丈夫？」

セピアさんが心配してくれた。なんだか嬉しくなって、私は、

「大丈夫です」

と妙に高い声で答えた。

ガラス張りの壁と同じように、出入り口もガラス張りの扉だった。私はゆっくりと開いて外に出る。「バイバイ、安奈」と見送るセピアさんの声が聞こえたので、振り返って小さく手を振る。すると、セピアさんも同じように小さく手を振ってくれる。少しだけ高揚した気分になって、街灯に照らされた歩道を歩いた。

自分の家へ帰り始めた途端、家までの道のりが次々浮んできた。どうやら記憶が無いのは、何も問題ないようだ。見知らぬ道を次々と曲がって行って、気がつけばごく普通の特徴の無い家の前に立っていた。誰の家かも分からないのに、その家が自分の帰る家だということが分かった。玄関を開けて中に入ると、入り口には鍵が掛かっていた。近くに置いてある花瓶の下に鍵が隠してあるので、私はそれを使って扉をあけた。これも急に思い出したことだ。

不思議な気分のまま、私は自分の部屋に向う。父親も母親もこの家にいないと分かった。どうしていないかは分からなかったけれど自分の部屋は二階に上がって一番近い所にある扉だ。私は扉を開いて、自分の部屋に入る。カバンをカバン掛けに引っ掛けて、制服

を少しだけ脱ぎ、そのままの状態でベッドに倒れむ。何故か今日は疲れてしまった。もう着替えずに眠ってしまいたいぐらい体が重い。別に運動をしたわけでもないはずなのに。

腕を瞳の上に翳して、照明の光を遮った。照明をつけた覚えはない。付けっぱなしでこの部屋を出たのだろうか。

「セピアさん……」

無意識に呼んだ名前は、やはりセピアさんだった。

そして、急に眠気が襲ってきた。

明日も、喫茶店に行こう。

そう思った。

気がつくと、次の日になっていた。身体は妙にだるい。昨日はあのまま眠ってしまったから、服も着替えていない。

日も表示するタイプの時計を見てみると、今日は九月の中旬だ。カレンダーと照らし合わせてみると、どうやら火曜日らしい。

私は時計から視線を外して、カバン掛けに掛けた学生カバンを見る。ちょうど部屋の扉の隣にあるそれには、学生カバンともう一つ、小学校の頃に使っていた手提げカバンが掛かっている。小学校の頃も思い出せないのに、どうしてそれが分かったのか。それはやっぱり分からないままだった。

とにかく、今日は休日じゃない。学校に行かなければならないのだ。

私はゆっくりと身体を起こし、自分の制服を確認した。昨日はけっこう暑かったので、服が汗臭くなっているかもしれない。そもそも一度着た服をまた着るつもりにはなれなかった。

私はクローゼットの中を探り始める。するといつ買ったのかも分からない、予備の制服セットが出てきた。私はそれを掴んで、すぐにベッドの上へ投遣りに置いた。部屋の窓のカーテンを閉めて、もう一度きちんと閉まっているかどうか確認した後、さっと着替えた。

匂いがするのは多分上の制服だけなので、予備の制服セットは、半端に中身が軽くなった状態でクローゼットに戻す。脱いだ服は一つにまとめ、後で洗濯物に出すことにする。先に朝食を食べたかったのだ。昨日からセピアさんの店食べたクッキー以外は何も食べていない。紅茶は食べ物じゃないので、数に入れないことにする。

私は部屋の扉を開けて一階に下りていく。キッチンに向かう途中でふと気がつく。私自身が匂うかもしれない。昨日はお風呂に入ることさえ忘れていた。

先に着替えて損したような気分になり、お風呂も後回しにする。朝食には面倒だから食パンを一枚、焼かずにジャムを塗って食べる。そんなにおいしいとは思わなかった。

飲み物も飲まないままパンを一気に食べたので、一応水を飲む。コップ一杯分水を飲んだ後、お風呂に行く準備をした。二階に置いてある洗濯物を持ってきてから、タオルを二枚用意する。脱衣所で服を脱ぎ、綺麗にたたんでタオルと一緒にして置く。お風呂場ではシャワーで身体を洗った後、髪を念入りに洗う。友達はリンスを使っているらしいけれど、私は使わないタイプだ。リンスの成分は、本当は髪の毛に悪いと何かで聞いたことがある。

お風呂場から出てくると、一枚のタオルで身体をしっかりと拭いて、もう一枚で髪の毛を丁寧に拭く。自然乾燥させたいけれどそんな時間は無いので、服を着てからドライヤーで無理やり乾かした。髪が痛まないと心配だったけど、それよりも学校に遅刻しないかの方が心配だ。

完全に準備が終わり、二階にカバンを取りに行く。その時に時計を見てみると、まだ学校には歩いても間に合う時間だった。

いつの間にか、記憶が勝手に浮んでくることに慣れてしまっている私がいた。

一瞬そんなことを考え、私は学校に出かけた。

学校は面白くも何ともなかった。友達との雑談も、笑ってはいるけれど楽しい訳じゃない。それに、私の場合は特に。いくら慣れたからといって、次々と知らない記憶が浮んでくるのを気にしないようにはできない。友達と笑いながら、気がつけば私は内心だけで驚いていた。

昼休みになると、屋上に行った。友達の弥生ちゃんやよいと一緒に弁当を食べた。私は学校に来る道の途中にあるコンビニで弁当を買ってきていた。弥生ちゃんは手抜きだね、と笑った。私もうん、手抜きと言って笑った。

九月の中旬は、まだ夏の日差しの強さが少しだけ残っていた。まぶしく輝く太陽を見上げて、弥生ちゃんは何故か嬉しそうに微笑んでいた。私がどうしたのか聞いても、何でもないといっそう笑顔で答えるだけだった。

私と弥生ちゃんは並んで弁当を食べた。他にも屋上で食べている人がいた。けれど、殆どはカップルばかりだ。

なんだか場違いな気がして、私も弥生ちゃんも早めに弁当を食べ終わり、その場所を立ち去った。

——そして午後の授業も平凡に過ぎ去って、放課後になった。弥生ちゃんを含めた友達六人と途中まで一緒に帰って、セピアさんの喫茶点が近づく、私一人だけが分かれた。

「バイバイ、みんな」

そう言って小さく手を振った。何人かは声を返してくれた。弥生ちゃんが小さく手を振り返した。

私はみんなと別れた後、急いでセピアさんの喫茶店に向かった。昨日喫茶店から帰った道とは全く違うのに、間違うこともなく進む。五分もしないうちに、セピアさんの喫茶店の前だった。

「——セピアさん、来ましたよ」

ガラスの扉を開いて店の中に入るとそう言った。夕焼けが綺麗になるまでにはまだ時間がある。店内に入り込む太陽の光はまだまだ強すぎる。

「あら、いらつしやい」

セピアさんは、昨日被っていたような渚の広い帽子を被っていた。服はけっこうお洒落で、けれど接客には向かない格好だった。

「その服、似合ってますね」

「そう？　ありがとう」

「でも、接客はできないと思います」

「大丈夫よ」

「……本当ですか？」

「本当本当」

妙に自慢するような口調でセピアさんは言った。それとも、ちやかしているのだろうか。まあ、どっちでもいいけれど。

「まあ、接客できなくても私には関係ないですけどね」

「なに、信じてないの？」

「全然です」

「ああ、信用無いわね、私」

セピアさんは手を額に喜劇じみた動きで持っていく。面白いわけではない。けれど私は不思議と楽しくなってきた、少しだけ笑った。

「今日は紅茶は出ないんですか？」

「高いのよ？　あれ」

「だいたいどれぐらいしたんですか？」

「安奈、紅茶の値段分かるの？」

「あ、多分、分かりません」

「そうね……分かりやすく言うと、普通の紅茶の三倍ぐらいの値段よね」

「結構高いんですね」

とは言ったものの、その三倍がどれだけすごいのかは分からない。

「おいしく飲んでもらわないと、困るわよ」

「大丈夫ですよ。おいしく飲みます」

私の催促にとうとうセピアさんは折れた。少し残念そうな溜息を吐いた後、紅茶を入れに行く。私は昨日眠っていた時に使った椅子に座る。

セピアさんが紅茶を入れて戻ってきたら、二人で一緒に紅茶を飲んだ。昨日みたいにクッキーを買わされることはなくて、雑談をしながら時間を過ごした。時間を潰した、とは考えなかった。

セピアさんと話している時間は、とても穏やかに過ぎていった。学校での時間は退屈で、のろまな癖してやたらと先走ろうとするけれど、この時間はちょうどいい速さで、並んで過ぎていくような感じがした。焦っているようでもなく、かといって呆けた感じでも無い。歩いて、けれど確実に進んでいるような。

私は、セピアさんこうして過ごす時間が好きだ。そして、昨日この喫茶店で目が覚めるよりも前から好きだったのだ。何故それだけを思い出したのだろう。変に浮んでくる途切れ途切れの記憶の中で、セピアさんとの間にある感情だけは一つに繋がっている。——とても、大切なことのように感じた。

「どうしたの？」

知らないうちに笑っていたのか、セピアさんが訝しげに訊いた。

「何でもありません」

多分、私はまだ少しにやけているんだと思う。

七時ぐらいになったから、私は帰ることにした。

「セピアさん。また明日」

「また明日ね、安奈」

お互いに言葉を交わす。セピアさんは手を振ったりはしなかったけれど、少しだけ微笑んで見送ってくれた。

私はセピアさんの温かさから遠のくように、背を向けてガラス張

りの扉に近づく。

その時。

「――安奈」

セピアさんが、私の名を呼んで呼び止めた。

呼び止めてくれたことがとても嬉しい。すぐさま振り向いて、

「なんですか？」

と答える。

すると、急にセピアさんの髪の毛が視線に入った。そして、私の身体に誰かの重みが重なる。――セピアさんに抱きしめられていると気付くまで、それほど時間は掛からなかった。

セピアさんの身体は私にぴったりとくっついていた。ちょうどセピアさんの頬が私の耳辺りにある。私の頬も、長い黒髪に隠れているセピアさんの耳の辺りにあるはず。

「……セピアさん」

私は何を口にいっているのか分からなかった。けれどそれは困惑なんていう感情じゃない。もっと鮮明で、けれど言葉にするには曖昧な気持ち。

「もう少しだけ」

セピアさんは、どこか壊れてしまいそうなか細い声で言う。

「もう少しだけ……ここにいて」

急に抱きしめる腕の力が強くなって、私は心なしか息が苦しくなったように感じた。

本当は苦しくなるほどの力はいれられていない。きっとセピアさんの何気ない言葉が、私を心を捕らえてしまっているのだろう。

私は――何故だか急にたまらなくなる。

そして、セピアさんの腕をゆっくり優しくほどく。

「――セピアさん」

名前を、呼んだ。

それ以上の言葉は、邪魔にしかならなかった。

私はすっと、背伸びをしてセピアさんの唇にキスをする。セピア

さんは私の突然の行動に驚いた。けれどすぐに、ゆっくりと返してくれる。温かいセピアさんの唇は、これまでのどんな食べ物よりも美味しいように感じる。私の輪郭が溶けていく。唇から始まって、体中が沸騰するように熱い。自分がなくなってしまうような恐怖を感じる。けれどそれも一瞬で蒸発して、幸福の皿がそこで温められるだけとなる。

キスなんて初めてののような気がした。いつもは簡単に浮んでくる記憶が、このときだけ全く浮んでこなかった。キスをしたことがあるのかないのか、少しも思い出せない。

なら、このキスを最初のキスにしよう。

「……ん」

私が唇を離すと、セピアさんは惜しいような吐息を洩らす。

私はセピアさんから一旦少し離れると、もたれかかるように抱きつく。何かなくしてしまうような気がした。けれどその消滅は、この幸せに勝るものとは思えなかった。この幸せが消えてしまっても、きっと幸せだった時間は消えてしまわない。と、私は信じる。

「帰りますね」

そつと扉の方を向きなおして、開く。

「また明日ね、安奈」

「はい、また明日」

そう言いあってから、家路につく。

次の日も、そのまた次の日も、私は同じようなことを繰り返した。学校に行つて無駄なことをして、弥生ちゃん達と少しだけ楽しい雑談をして、最後にセピアさんの喫茶店に行つてお喋りをする。キスもした。そうやって代わり映えのない、けれど心地よい日々を過ごしていった。

そして、一瞬の内に日々は過去になった。今だった火曜日はとくに過ぎ去っていて、振り返ることはできても引き返すことはできなくなった。今の私は金曜日という今を進んでいる。金曜日の一瞬は流れ去って今から遠のき、物凄い速さで地平線へ向かっている。その向こうに行ってしまった今達が、忘れられた記憶となるんだろう。

時間とは、不思議なものだ。昨日なんて、この場所には存在しない。それなのに昨日というものは、確かにここに在ったもので、消えてもいないのに何処にも居ない。何故だろう。考えても答えは出ない。それでよかった、とも思う。あまりに簡単なことだと、価値が薄くなってしまふ気がしたから。

私は自分の家を出て、学校に向かっている。

校門のすぐ眼の前で、弥生ちゃんと会う。

「おはよ、安奈」

弥生ちゃんは私の後ろから近づいてきて軽く肩を叩く。

「おはよう、弥生ちゃん」

私は振り返りながら弥生ちゃんに返事を返す。言い終わってすぐに、弥生ちゃんは私の前に歩み出る。

「ね、安奈。今日ってさ、確か英語のテストがあつたよね」

「あれ？ そうだったけ」

私は自分の記憶を探る。いつもならここで記憶が浮んでくるはずなのに、何も浮んでこない。

「昨日の授業の終わりに言われたでしょ？ 忘れたの？」

なるほど、それなら浮んでこないはずだ。昨日の英語は休み時間になるまで眠っていた。

「ごめん、ずっと寝てた」

「ああ、それじゃあテスト勉強もしてないっぽいね」

からかう調子で弥生ちゃんは私に言う。

「そう言う弥生は？ テスト勉強するタイプじゃないよね」

私は対抗してみる。なんとなく、どうなるか結果はわかっていた。

「私はテスト前に十分も勉強すれば結構いい点とれるし、テスト勉強ナシでも安奈より賢いもん」

「うわ、自慢しちゃってる」

「自慢してない！」

本気で怒っているみたいに反応する弥生ちゃんが面白くて私は笑った。結果はこの通り私の勝ち。弥生ちゃんは妙なところで抜けているので、ちょっと論点をぼかしてやると簡単に自爆する。弥生ちゃんとのこういった会話は、もしかするとセピアさんとの雑談の次に楽しいかもしれない。

「どうしたの？」

にやけている私を見て、弥生ちゃんはそう尋ねてくる。私は何でもない、と答えてにやける顔を普通にしようとした。けど、簡単には治らない。まあいいや、と簡単に諦めてしまふ。他人から見たらかなり気持ちの悪い光景だな、と思う。

「——ね、安奈」

「何？」

「放課後も、一緒に帰らない？」

急に、声色が変わったような気がする。気のせいだろうか。

「うん、いいけど」

その答えを聞くと、弥生ちゃんの顔が晴れやかになったように見えた。これも気のせいだろうか。……違う、となんとなく思った。

その日の放課後、私は弥生ちゃんと一緒に帰った。すると、あまりにも予想外なことが起きた。

弥生ちゃんに告白されたのだ。

それも、恋人同士の『好き』の意味で。

同じ女子に好きと言われることに違和感はない。なにしろ私もセピアさんが好きだ。だから、友達と思っていた弥生ちゃんに好きだと言われたことが一番の驚きなのだ。

放課後、いつも通りの友達と一緒に帰ろうと声をかけたら、みんな何かしらの用事があった。結局一緒に帰ることになったのは私と弥生ちゃんだけで、何か妙だな、とは思っていた。今になってみれば、弥生ちゃんにみんなが協力していたのだらうと思う。

変な強力のおかげが原因か、私は弥生ちゃんと二人きりで帰ることになった。セピアさんの店に行く為に分かれようとしたとき、弥生ちゃんに呼び止められた。そして、たった一言囁いたのだ。

私、安奈のことが好き、と。

友達として、と私は考えて聞き返した。すると弥生ちゃんは違うと答えた。私のことを、女性が男性を好きになる時のような感情で好いていると。そんな答えを返された。

呆然としながらも、私は何とかその言葉に返すことができた。

返事は、待つてくれないかな。

それはただのその場しのぎでしかないことは分かっている。けれど、そうしないと正しい答えは返せないのではないかと思った。きちんと気持ちを整理しないと、弥生ちゃんを傷つけてしまうような気がしたのだ。

とにかく、私はセピアさんに相談することにした。

セピアさんは喫茶店の扉の前で待っていた。

「いらっしやい、安奈」

「お客が入ってきたら、間違いなく変人扱いですよ」

セピアさんを押し込むように店に入りつつ、そう文句を言う。

喫茶店の椅子に座る。相変わらずの椅子だ。普通は店の椅子が変わることなんてそうそうない。けれど、この椅子がこの場所ですつとあり続けるのは、何故かとても大切なもののように感じる。

椅子だけじゃない。この店も、ずっと前からあって、セピアさんだつてずっと生きてきた。こうして続くことはきっと、何よりもすごいことなのだ。変わらなければ、人はより善く生きられない。け

れど続くことでよくなる命もある筈だ。きっと私も――

「――どうしたの？ 随分眠そうね」

セピアさんの声で、私ははっとする。どうやらまどろんでいたらしい。

「多分、学校で疲れたんですよ」

「ああ、今日は金曜日ね」

「明日の補習を考えると、いつそう眠くなります」

「大変ね、学生は」

私の成績が良くないことを知っていながら言うセピアさん。

「……嫌味ですか、それとも冗談ですか？」

「両方」

冗談らしい口調で言い返される。

「両方って、どんな感じなんですか」

文句でも言うように私は言う。

「冗談で嫌味を言ったのか、嫌味な冗談を言ったのか」

「どっちでも嫌味だったことに変わりないですね」

「じゃ、嫌味だったってことでしょう」

そんな風に、無駄なことを話した。

セピアさんとの話は、幾ら繰り返しても飽きない。きっと、その瞬間瞬間が二度と帰ってこない大切なものだからなのだろう。何も手に入れない時間は無駄なのかもしれない。でも、価値が無いなんて誰も決められないはずだ。無駄だけれど、大切な価値のある時間を過ごしたい。そうしたら、きっといつか無駄ではなくなる時が来るはず。

「……あの、セピアさん」

私は今日の帰りに弥生ちゃんに告白されたことをセピアさんに明かした。

「……うそ、告白されちゃったの？」

まずそこを驚かれてしまう。

「ちよっと失礼な言い方ですね」

「だって、安奈は見るからに女の子の人気なんてなさそうでしょ？」

「セピアさんはどうなんですか」

「私は——まあ、ね？」

珍しく、セピアさんが照れる。指摘してからかってやろうと思った。そうすると、普段と違ってかわいいセピアさんが見られるような気がした。けれどそれよりも先に、相談して楽になリたかった。一瞬限りの欲求を押さえ込み、次の言葉を口にする。

「どうすればいいでしょう」

「……とりあえず、返事は休日明けにでもしておいたら？」

確かに、一応それだけの時間が有れば心の整理もつくかもしれない。意外と今も落ち着いているつもりなのだけれど、そう思っているうちは落ち着いていないはずだ。落ち着いているな、と第三者的視線で思えなければ落ち着いているとはいえない。

私は、携帯電話をポケットから取り出した。そして、弥生ちゃんに電話をしようと思った。期待して待っているのだろうか。そうだとしたら、返事を後延ばしにするような電話は弥生ちゃんを落ち込ませるかもしれない。

「——そうだ、ちょうど良かったわ」

その時、セピアさんが呟く。

「旅行よ」

「はい？」

私は意味が分からなかった。

「旅行に行くわよ。その弥生つて子も連れて」

なおさら意味が分からなくなった。

よく話を聞くと、段々とセピアさんの言っている内容がはつきりしてきた。

つまり私にも弥生ちゃんにも心の整理がつけられるように、普段とは違う環境に身をおいてみよう、といったことらしい。簡単に言

つてしまえば、旅行で気分転換するといったところだろう。もう少し慎重なのかもしれないけれど、細かい意味はあまり気にしないでおく。

セピアさんは旅行のことを口にした瞬間から、何が何でも旅行に行く気になっていた。私や弥生ちゃんのオツケーも無いのに、勝手に旅行の準備を始めるほど。しかも、その旅行には明日出発するらしい。私には補習があるのに、と文句を言つと、そんなもの知らない、と切り捨てられる。これだけはある意味都合だった。

——旅行だ。

やっぱり、少し楽しみかもしれない。

旅行は翌日、土曜日の早朝から始まった。昨日の晩に連絡されたばかりなのに、完璧な準備をして弥生ちゃんはやってきた。セピアさんは一番張り切っていたのに、自分の準備に関しては一番抜けていた。私は可も不可もないぐらいだけど、妙なところがよく抜けていた。土壇場の旅行となると、やっぱりこんなものなのだろう。

予定としては、土日の一泊二日で旅館に泊まるらしい。ちょうど空きがある旅館をセピアさんは昨日のうちに見つけたらしい。そういうところはいっしょかりしている。

私達はセピアさんの車に乗って出発する。セピアさんの話によると、山のすぐ傍の町で、海もけっこう近いらしい。私達の住んでいる町とは全然違う。山も海も見当たらない私達の町は、ある意味では都会なのかもしれない。街並みの外観から考えると、やっぱり田舎の仲間なのだろうけれど。

二時間ぐらい車に揺られて、私達は旅館に辿りつく。自然の香りがする、田舎の旅館だ。なかなか風情があるように感じる。弥生ちゃんも初対面のセピアさんに緊張していたのか、すでに疲れたような表情をしている。

私達が車を降りると、セピアさんはこう言った。

「私がいろいろやっておくから、あなたたちは観光にでも行つてらっしゃい」

私も弥生ちゃんも、旅館よりは観光の方が楽しみだった。言葉に甘えることにして、さつさと観光に出かけてしまふ。なんだか悪いような気がしたけれど、セピアさんが言い出したのだ。そう考えて割り切ることにする。

結構長い間、田舎町を歩いた。それほど観光と言うほどの名所は無いけれど、近くの山並みはなかなか綺麗で、旅行雑誌の表紙なんかになっていそうな感じだった。街並みも不思議な雰囲気がある。駄菓子屋や小さな薬局があるのは妙に現実的で、私達の町よりも随分と小さな住宅街もあった。何が楽しいのか私にもわからないけれど、弥生ちゃんも私も高いテンションを維持して街を回り続けた。緊張による疲労はすっかり取れたらしく、弥生ちゃんは私よりも元気になっていた。

何より、空気が美味しい。それが分かった。私達の町よりも、空気が澄み渡っているように感じる。

幸せだな、と私は思った。月並みな言葉だけれど、それだけ大事なことだ。この幸せ、たかが田舎の観光は、きつとかけがえの無いものなのだ。

私と弥生ちゃんが暫く歩いていると、バスが近づいてきた。ちょうど私達の向かい側からやってきて、通り過ぎたばかりのバス停で停まる。バス停は十字路の角なんていう変な場所にある。排気ガスの匂いがやたらと匂う。

「乗ってみない？」

弥生ちゃんが乗りたそうな声で尋ねてくる。バスは時刻表より早く来てしまったのか、誰もいないのに出発する気配が無い。

「乗ろうか。どうせ暇だし」

暇なんて言ったら、セピアさんに失礼だ。私は自分で自分に注意

する。

エンジン音のうるさいバスに近寄ると、運転手の顔がガラス越しに見える。意外と若い。三十代ぐらいだろうか。

扉は閉じていた。けれど私達が近づいてきたら、勝手に開いた。きつと運転手さんが開いてくれたのだろう。

私達はバスの中に乗り込む。

「すみません、このバスは次に何処で停まるんですか？」

私は運転手さんに訊く。

「次か？」

「はい」

「次は……海の近くだ」

「幾らぐらいですか？」

今度は弥生ちゃんが訊く。ふと、私は財布を捜す。——どうやら財布は、セピアさんに預けた荷物と一緒にだったらしい。迂闊だった。「百五十円だ」

セピアさんから買ったクッキーと同じ値段だった。消費税の七円は考えないとして、だけれど。

そういえば、セピアさんにお釣りの三円を返してもらっていただろうか。返してもらっていなかったような気がする。

そんなことを考えている場合じゃない。財布が無いのだ。このままだと、無銭乗車になってしまう。

私は弥生ちゃんを横目で見ると、どうやら弥生ちゃんも財布を忘れてきてしまったらしい。ポケットの中を探した後、私のほうを向いて首を横に振る。

「——金は要らない」

運転手さんが呟く。

「ただし、次で絶対に降りるんだ」

とても親切な言葉。私達はすっかり笑顔で、

「ありがとうございます」

と感謝した。

バスは心地よく揺れた。私達はバスの真ん中ぐらいの席に座った。私が窓際で、弥生ちゃんが通路側。窓から見える外の景色は、観光しながら見た景色よりも立派なもののように見えた。季節は秋なのに、まだ夏の日差しを微かに残した太陽。心地よい眩しさを車内に撒き散らしながら輝いている。すぐに山の景色はどこかに流れて消え、青空と海の見える景色に変わる。百五十円の割には、随分と長い区間をバスは走った。海沿いの道を一分。充分景色を楽しんだ頃にバスは停まった。

私達はバスを降りる。旅館に着いたのは昼前ぐらいだったのに、もう日は随分と低くなっている。まだ夕焼けと言うには高いけれど、あと一時間、ここで海の上の太陽を眺めていれば、きっと最高の夕景が見えるに違いない。

バスは大きな音を立ててどこかに走り去っていく。次はどこに停まるのだろうか。分からない。それでもいいか。なんて気持ち胸の中で揺らめく。

風は涼やかな香りと共に吹き込んでくる。本当はただの風。臭いも香りもあるはずはない。けれど確かに、この風は香りを漂わせる風だ。誰にも感じなくなったら、私は感じる。

「行こう、弥生ちゃん」

私は弥生ちゃんに呼びかける。

「うん、安奈」

弥生ちゃんはしっかりと答えてくれた。

慎重な歩調で砂浜を歩く。足は微かに沈む。けれど沈みきることはなくて、確かに普通の大地と同じく私を支える。漣の音が、砂浜を足で踏む音が、ちっぽけな私の耳を攪る。

「——ここに座ろう」

弥生ちゃんは、小さな岩を指差して言う。ちょうど二人座れるぐらいの大きさだ。

「うん」

返事は風に飲まれて、遠くに飛んで行く。けれど弥生ちゃんにはしつかり伝わったらしい。それが分かったから、私は岩に座る。弥生ちゃんも同時に座る。

二人で海を眺める。その向こうには太陽が在って、太陽の向こうにはさらに大きな世界がある。私にはこの町は大きすぎて、この町にはこの惑星が大きすぎる。そして惑星には世界が、世界には時間が大きすぎる。太陽のように、海のように、輝かなくても広くなくとも、私達はここにいます。大切な、生まれてきただけで与えてもらえた時間を浪費しながら、それでもここにいます。誰も私たちがいたことを消せない。何も私たち小さな存在には消すことなどできない。こうして、どんなものも、ずっとあり続けるのだ。

なんと素晴らしいのだろう。

私とセピアさんも、私と弥生ちゃんも、決して消えることがないなんて。

じつと空を眺めていると、いつの間にか夕方になった。綺麗な夕焼けが、水平線へと消えていく。

「——ね、弥生ちゃん」

私は弥生ちゃんに何かを言おうとする。自分でも分からない感情が口から飛び出してきそうだ。

「……言わなくてもいいよ」

けれど、その前に弥生ちゃんが瞳を閉じて呟く。

「もう、分かっているから」

言葉がゆっくりと、私の心に染み込む。

弥生ちゃんは、私にも分からなかった私自身のことを分かってくれた。今なら分かる。分かってもらえた今なら。

私は、弥生ちゃんやセピアさんを一番好きにはなれない。二人とも大切だ。天秤に乗せたところで、きつと傾きはしない。二人の価値は私にとって比べようもなく、かけがえのないものなのだ。そも

そも比べることさえ私には難しい。

一番なんて安っぽい言葉じゃない。それは全てを越えた、そしてどんな愚かなものさえ包み込む、最高で簡単な気持ち。ただの『在ってほしい』という存在欲。

セピアさんがいれば。弥生ちゃんがいれば。他の全てが欠落したって、例えば私がこの世から零れ落ちてしまったとしても、大したことではないとさえ思う。

そんな気持ちが私の中に——たまらなく愛しいという感情の塊りを成長させた。

耐えられなくなった私は、弥生ちゃんを優しく抱き寄せる。

「——弥生ちゃん」

一声だけ弥生ちゃんの名を呼ぶと、ゆっくり、優しく口付けを、キスをした。セピアさんとするような熱く深いキスじゃなくて、弱く触るようなキス。それでも弥生ちゃんの体温が伝わってきて、バターみたいに私の感情を溶かしていく。

必要なんでない。

でも、私は求めた。

もっと大切であることを感じたい。誰よりも私がその人にとっての私であることを示したい。

数分間、唇を離さないままにいる。けれど、突然私たちは身体を離れた。ゆっくりと抱き締め合った腕を解き、沈んでゆく太陽を眺める。

「——綺麗だね」

私は弥生ちゃんに言う。

「うん」

恥ずかしそうな答えが返ってきた。

——太陽が沈みきった頃に、セピアさんが車で迎えに来た。何故か、この場所に私たちがいることを知っていたようだ。

三人で車に乗る。私は弥生ちゃんと手を繋いだ。バックミラーでそれを見たセピアさんは、

「……運転手、代わってもらおうかしら」

なんて言ってやきもちを焼いた。普段と違う様子のセピアさんがかわいかった。

ああ、違う。私が普段と違うんだ。普段よりも、ずいぶん気分が高揚している。

次の日が来るのは早かった。旅館での食事も、三人が同じ部屋で眠ることも、全て楽しい思い出となった。弥生ちゃんの寝相がやたらと悪いことを発見したのは、私よりもセピアさんが先だった。ちなみに私は、幾ら起こしてもなかなか起きないらしい。

旅館から出る準備をして終わったら、私たちはセピアさんの車に荷物を詰めた。そして三人一緒に街を巡った。

車で途中まで移動してから、面白そうなものを発見すると、全員で降りて見に行った。昨日見た駄菓子屋さんでは、お土産代わりにお菓子を買った。木製の車の玩具がおまけについたもの。三人全員が、まったく違う形の車を引き当てた。

町全体を巡った後は、帰るだけとなった。昼ごはんを小さな飲食店で食べたあとは、真っ直ぐに私たちの町に帰った。

辿り付いたのは、夕方だった。

弥生ちゃんはセピアさんの車から降りると、自分の家へと帰っていった。セピアさんが送ろうか、と尋ねると、

「近いので大丈夫です」

と答えた。

セピアさんと私は、重そうな荷物を持って帰る弥生ちゃんを見送

る。そして曲がり角を曲がって姿が見えなくなると、喫茶店の中に戻る。

「……やっと帰ってきたわね」

「そうですか？ 結構早く帰ってこれたと思いますけど」

「私は車の運転してたのよ？ あなたたちよりよっぽど疲れたの」

「あはは……それもそうですね」

私とセピアさんは少しだけ会話をしてからそれぞれの行動に移る。私は荷物を整理すると何もやるものがなくなったので、椅子に座って休むことにする。セピアさんは自分の荷物を片付けるために店の奥へと姿を消す。

私は机の上に視線を落とす。何も無い。何も無いところをじっと眺めているうちに、眠気が襲ってくる。激しい眠気だ。相当疲れてしまったのだろう。

「——セピアさん、ここで眠っていいですか？」

「いいわよ。ゆっくり眠りなさい」

何処かから、思ったよりも大きな声が返ってくる。

私はなんとなく、机にうつ伏せになってみる。

手の平には、あの木の車が握られている。机の上においてみる。不思議と雰囲気合っていて、和やかな気持ちになる。この気の手は、ただのお菓子のおまけ。なのに、そのおまけの木の車がとても大切に感じられる。不思議だ。こんなにも理由のない感情が湧き上がってくるのは。

ゆっくりと睡魔が襲ってくる。何故かもう二度と起き上がれないような気がする。そして途切れた記憶もそれを肯定する。もう、起き上がれないんだ。もう、この世界で苦しむことはない。

そうだ。私は苦しかったのだ。身体が有ることが。心が在ることが。セピアさんと弥生ちゃんに対する私の存在欲は、身体にも心にも余るものだ。私は消えない。けれど、肉体も心も無くなって、世界から解放されたとき、初めて私は最高となれる。

私は——命を捨てようとしている。

次にやってくる眠りは、限りなく死に近い眠り。それは、途切れた記憶が浮んでくる時のように、突然浮んできた事実。けれど避けられないのは知っている。避けようとするのが愚かだとも知っている。

だからこそ、私は最高になれる。セピアさんにも、弥生ちゃんにも、全てを与え、受け取ることができる。

消えていく。そう感じる。私の全てが無くなってしまふ。けれど無くなる前の私は消えない。だから消えた後の私は消えた私として存在する。きっと、誰にも触れられない、セピアさんと弥生ちゃんだけの存在となるのだろう。

私は思い出した。自分が作られた命だということを。その所為でこれから死のうとしているのに、そんなことは些細なことだ。意味も無い、理由も無い、やたらと軽しい幸福感が全身に満ちていく。永遠の眠りを恐いとは感じない。

ただ、その永遠を夢見た。
偽物の生活の中で。

「——そうよ安奈、クッキーのお釣りだけど、返すの忘れてたわね」
セピアさんがやってきた。

——私は返事を返さない。
返してやるものか。

セピアさんに、見つけてもらうんだ。

「……眠ったのね」

そう。私は眠った。
知っていたのだ。今日眠れば、それが最後になること。

初めから、私は今日眠る為に目覚めた。だから今日のこの眠りは避けられなかった。

「おやすみなさい。 安奈」

セピアさんは、私の横に歩み寄る。ゆっくりと、本当にゆっくり

と私の髪を撫でてくれる。その表情は本当に落ち着いていて、なのに泣きそうな、不思議な感じだ。

三円を、私の木の車と一緒に置いた。

ついでに、セピアさんの木の車も置いた。

「バイバイ…… 安奈」

涙を流すセピアさん。

やっと見つかった。

やっとセピアさんも見つけられた。

これで終われる。

私はセピアさんに、じゃあね、と手を振った。また会うことは無いけれど。

小さな木の車がある。

走ることもなく、転がることもなく停まっている。

ブローグストーリー（後書き）

この話はタイトル通り連載作品『Imitation Life』のブローグストーリーです。

視点は本編ではヒロインの安奈になっています。

テーマは命。単純ですが、決して答えの出ない問い。

ただその多様な問いの一面を、こうして作品にしてみました。

ブローグである分、問いは未だ投げかけられたばかりで、何の答えもありません。

それでも、作品を読むことで得られる『何か』がある。

きっとそれが、皆さんの答えではないでしょうか。

少しでも幸福な答えが待っていることを願います。

A n t C o n f i d e n c e

女性が一人、少女の死体にすがりついて眠っていた。

場所は恐らく喫茶店。白を基調にした爽やかな内装と、落ち着いた雰囲気をもてるオレンジの照明。ソファのようなデザインの子と、ガラスを素材に使ったテーブル。女性はそのテーブルの上うつ伏せている少女の隣、まるですがるように抱きついて眠っている。少女の表情は穏やかで、まるで死体のものとは思えない。今にも動き出しそうだが、確かに少女は死んでいる。心機能停止、そして瞳孔は開ききったままである。もしこの死体がこの場に放置されていたならば、二十四時間も経てば死斑が現れ、体内の微生物に肉を食い散らかされることとなるだろう。

全てのしがらみから解き放たれたような表情の死体に対し、女性の顔は酷かった。精神的か肉体的か、若しくは両方の理由で酷く透き通った白い顔になっており、むしろこの女性の方が死体と呼ぶべき表情をしている。

時刻は夜。壁の一面が完全にガラス張りになっており、外の光や景色が入ってくる。ガラス越しに見える景色は、街灯と月光に照らされる街道。夜の景色と色だ。

ちょうどガラス張りの壁の横に、金属の枠で仕切られた同じくガラス製の扉があった。女性が眠る場所と反対側の壁の隅。――扉越しに黒い影が見える。背の高い男だ。黒い皮のズボンが街灯の光を受けて鈍く光り、羽織る黒いロングコートは膝を隠す長さの物。髪の色も瞳も漆黒。完全な黒尽くめの男が立っていた。

男は扉に手をかける。キリリ……と金属の擦れるような音を立てて扉は開く。男は滑るように歩いて中に入り辺りを見回す。

「――まだ喫茶店をやっていたのか？」

そう言くと、眠る女性の方向を向く。返事は無い。それで男は女性が眠っていることに初めて気が付く。

「……セピア、起きろ」

男は人を目覚めさせるには足りない声量で言う。そしてゆっくり近づいて、女性の肩を揺らす。その拍子に、女性の長い髪が揺らめく。ササ、と微かな衣擦れの音がする。

すると、女性はゆっくり目を開ける。男はその様子を見ると、すかさず言う。

「『人形』の後処理に来たぞ」

「……水鶏」

女性は意味も無く男の名前を呟く。男は女性の声から何を察したのか、こう呟く。

「駄目だ。その人形をお前にこれ以上扱わせる訳にはいかない。お前自身の破滅じゃない。下手をすれば、この星の破滅に繋がる」

星の破滅、とはどういうことなのだろうか。男の口にした言葉は非現実に残っていた。

しかし、女性はその意味を解いたらしく、

「……安奈は、そこまで危険じゃないわ」

と、はつきりとした意思を持って答える。

「安奈は私が作った、ただの『人形』。プラネットインフレイションを引き起こす要素は何も無いわ」

ここでまた、不可解な単語が口にされた。プラネットインフレイション、直訳すれば惑星膨張。具体的にどのような意味を示すのか。「お前が作った人形は、五十年前に病気で死んだ唯代安奈の肉体を基礎に置いたものだ。それは本来の手段からかけ離れたもの。お前が異端の人形を作ったことによって、理に破綻が生じた。——下手な処理をすれば、その人形は理を歪める。歪んだ理は世界の一部を破綻させたまま、次第にこの星全体を包み始める。それを切っ掛けにプラネットインフレイションが発生する」

男は女性に言い聞かせるように言い続ける。その言葉を聞くと、女性は顔を俯かせてしまう。

「なら……安奈は、殺されなければいけないのね」

すでに死んでいるはずの少女に対し、女性はまるで生きているかのような表現をする。

「……安心しろ。酷く扱うことは無い。まずは肉体を処分し、そこに残った情報を本当の人形に移し変える」

「結局、安奈は死んでしまふのね」

冷たい声で女性は言う。

「命は脳の電気信号でできているんじゃない。その肉体に、決して外れない楔によって繋がれているものよ。安奈の全と同じ人形が作れても、それは安奈じゃない」

女性の声は、まるで哀しみを音にしたように悲痛だった。そしてその響きは男にも辛く感じられる部分があったのか、微かに顔を俯かせる。瞳は長い前髪で隠れて殆ど見えないが、やはり辛そうに細められている。

「——諦める。お前の知っている唯代安奈は、五十年前に死んだのだ。そのままだが本来の理であるのに、お前はそれを歪めて、再び『唯代安奈』を生み出した」

男に言われ、女性はさらに俯く。

「結果としてお前は二度目の死を目の当たりにしなければならなくなった。それがお前の罪に対する罰だ」

次々と重ねられる無慈悲な言葉。女性はすぐ近くの少女の死体に目をやる。暫く押し黙る。無音の時間が長すぎるほど続いた後、何を思ったのか、

「……ねえ、取引をしない？」

と呟く。

「取引、とは？」

「私の『力』を貴方に渡すわ。その代わり——」

男——水鶏は、中央の芸術的な石柱が斜めに倒れかけている池の辺に座った。大地は深い緑の芝生に覆われ、広い間を置いて森が広

がつている。まるで童話や神話に出てくるような美しすぎる光景。

水鶏は芝生の表面を撫でるように手を置く。続いて広がる鏡のような水面に目をやると、突然声を出す。

「——ユグ」

何かの名前のように虚空に呼びかける。

気付くと水鶏の隣に一匹の獣がいた。狐と犬の間のような姿をした獣。尾が二本あり、その先端の毛は紫に近い青だった。他の体毛は、金と白。

「……鷺を呼んできてくれないか？」

水鶏は傍らの小さな生き物に呼びかけた。言葉を理解しているのかそれとも反射か、その獣は水鶏の顔を見た。

「——セピアに頼まれたんだ。あいつの力を俺が『奪う』代わりに唯代安奈の人形に自己の在り方を決める時間と権利を『与える』ように」

キィ、と甲高い声で獣は鳴いた。鳴き声を出した瞬間、尾の青い毛の色が深まる。一瞬で消え去り、すぐにその変化は分からなくなる。

「俺の力を使えばそれは簡単だ。しかし——」

「それが理を歪めない域の話かどうかは分からない、でしょ？」

突然、よく響く女の声が聞こえる。

「……鷺。早かったな」

「ちょうどこの近くにいたの」

そこに現れたのは背の低い女性。全体的に白い印象を与える服装をしており、水鶏とは対照的だった。

「久しぶり、ユグ」

女性はしゃがみ込み、水鶏の隣にいる動物——ユグの頭を撫でる。「水鶏はしっかり君の事を守ってくれてるかな？」

ユグは頷く。どうやら言葉を理解しているらしい。

「そうか、じゃあ大丈夫だね」

意味深な言葉を少女は発する。ユグに話すことはなくなったのか、

ユグを抱きかかえ、水鶏の隣に座りこむ。

「……安奈ちゃん、死んだんだね」

「ああ。人間の肉体に、人形の理は大きすぎる。本来は一ヶ月ももたない身体を、何度も休眠させることによって五十年も維持させたんだ。いつ死んでもおかしくなかった」

「うん……頑張ったんだよね」

質問するような形で少女は言う。

「鷺……お前の力でどうにかできないか？」

「無理」

少女——鷺は、すぐさま否定する。

「だって、私の力は歪んだ理を再び平坦に戻すもの。理を歪め続ける異端に対しては何の力も無いの。——水鶏の力なら、異端だけを奪えるんじゃない？」

「それも無理だ。その行動が更なる異端の引き金になる可能性が高すぎる」

水鶏は呟き、しかし立ち上がる。

鷺は水鶏の横顔を見上げる。お、と意外そうな声を洩らした。

「——けれど、今度は逃げることを許されてはいない。いや、逃げてはいけない。あの哀れな女——セピアを、悪夢の淵から救い上げなければならぬんだ」

「やっと、決められるようになったんだね」

「ああ。もう迷いはない。俺は……たとえ悪人や患者の絶望、不幸でさえ拭い去ってみせる」

水鶏はしっかりとした瞳で、全ての迷いを破ったような声で言う。

「——そう。じゃ、頑張つて。私、応援するから」

鷺はそう言つて、ユグを膝の上から下ろして立ち上がる。

水鶏の手を取り、優しく握る。

「……この手が、今まで何人もの人を救い出してきた。私もその一人だし、きつとセピアさんも——安奈ちゃんも救われる。そして、その力を持っているのはこの手でも水鶏の体の能力でも無い。水鶏

自身の望み。身体に宿る力を道具に、様々な願いと希望を与え続けて来たの」

「ありがとう、鷺」

水鶏は手を握り返す。

「——これで、戦い続けられる」

水鶏の言葉の後に、ユグが一声高く鳴く。

「ああ、頑張っているさ」

——水鶏の言葉を最後に、世界が一気に白く変色する。一面が完全な白になり、なにもかも消滅した後、水鶏自身の姿も、そこから消える。

セピアとは、イカという意味のラテン語だ。

当時、まだセピアが自らをセピアと名乗らず、本当の名前——小見原皐として生きていた頃のことだ。

皐は『人形師』としての己の本質を隠し、普通の少女と自らを偽って生活していた。当然普通の少女には家族もあり、学校に行く必要もある。よって皐は学校に通っており、両親は人形で代用していた。当時、まだ皐は十六歳。

その頃、皐には一人の親友がいた。

その親友の名は、唯代安奈。皐と似たような力の持ち主で、そもそもその力を理由に二人は知り合った。

ある日、安奈は皐にこう問い掛けた。

「セピアってラテン語、知ってる？」

皐は首を振る。それを見て、安奈は優しげに微笑む。

「セピアって言うのはね、『イカ』って意味のラテン語なの」

「……あの足が十本ある？」

「うん、そのイカ」

それがどうしたのだろう、と臯は思った。そして、その思いを伝えずとも安奈は悟った。

「昔ね、イカの人形が家にあったの。どうしてなのか知らないけど、パパがセピアって呼んでた。別にセピア色してるわけでもないのに、どうしてなんだろう、って思ってたんだ」

そこまでを聞いた限りでは、臯には何も話の真意が浮んでこない。実際、きつと話の根幹にはまだ少しも触れていないのだろう。

「で、ある日パパが教えてくれたの。セピアって名前は、ラテン語で『イカ』の意味だって。どうしてそんな名前をつけたのか聞いたら、だってイカだから、って答えてた」

「……それで？」

臯は話の続きを聴きたかった。

「で、そのイカの人形は、今では色褪せてちょうどセピア色みたいになっちやってます。それだけの話」

話の結末は下らないジョークでしかなかった。

「どうして、その話を？」

予想していたよりも下らない話の結末に、臯はがっかりした。そしてその気持ちを紛わせるように聞き返す。

「臯ちゃんに知っていてほしかったから。イカだって、セピアなんてお洒落な名前をもってるんだってこと」

「——全然意味が分からない」

まるで文句を言うように、その時の臯は呟いたものだった。

「だから、かわいいじゃん、イカ」

「別に」

「だってセピアだよ？」

「もつと意味分らない」

そんな下らない会話を交わすことが、その時の臯にとっては幸せだった。

しかしある日、安奈は死んだ。

殺されたのだ。

その日、安奈は皐の家に遊びに行く約束をしていた。それも夜中に。

そして皐の家に向かう途中、安奈は男に襲われた。肉体を蹂躪された後、全身をナイフで切り裂かれて絶命した。どれだけ待ってもやってこない安奈を心配した皐は、安奈を迎えに行った。その道中に転がっていたのだ。無惨に切り裂かれ、内臓やら肉片やらを飛び散らせている安奈の残骸が。

それを見た皐は思った。自らの力で、安奈を人形として生き返らせよう、と。

皐の力は人形を創るという力だ。人形は基本的に無機物から作るが、有機物からでも作れないわけではない。ただ、有機物の人形は寿命が存在する。無機物人形にもある物質的な劣化だけでなく、生命体としての劣化も伴うので、本来の人間などよりも短命となるのだ。

皐はそれを知っていながら、それでも安奈を生き返らせようとした。

当然、その術はさほど難しいものでも無いので、安奈は生き返った。

だが、安奈は再び自らに与えられた命を断った。

「ねえ皐ちゃん、プラネットインフレイションって知ってる？」

「……何、それ」

「わたしたちみたいな特殊な力を持つてる人が限度を越えた術を使用すると、地球からの物理的制裁がくだる。けれど限度を越えた術は理を歪め、地球はそれを戻せない。歪んだ理がたくさん生まれたら、それは限度を越えた術に等しい価値をもつようになる。地球はそれを消し去ろうと内部からエネルギーを解き放ち、制裁を降すけれど、理は元に戻らない。地球は次々とエネルギーを放ち続ける。次第にそれ自体が理の歪みとなり、とうとうそれが地球全体を包ん

だころ、地球は全方位に目掛けエネルギーを放ち、自らが爆発する。そうして地球が滅びてしまうことを、プラネットインフレイションって言うの」

安奈の人形は、そうやってプラネットインフレイションのことを説明した。皐はそれを聞いているうちに、恐ろしくなってきた。自分のこの術が、もしかするとこの星を滅ぼすかもしれないのだ。――大丈夫。有機物の人形を作る事は限度の範囲内。そして死者の魂を人形に蘇らせる事もまた、その範囲内なの。……けれど、蘇った死者は生き続けてはならないの」

「それって……」

また、安奈が死ななければならない。そういうことなのではないのだろうか、と皐は不安になった。

「大丈夫。私が死ななければならないわけじゃないの。ただ、『私』が存在してはいけない」

皐ははっとした。安奈の人形が呟いた言葉の示す、最終的な結論が一瞬頭の中に浮んだのだ。

「私も人形を作る力を持っている。けど、皐ちゃんと違って私が得意なのは人形の『心』を作る方。――もう、分かるよね？」

そう、今の安奈は人形だ。その力を使うことができるのなら、安奈は――自らの心を作り変え、今の自分という存在を消滅させられる。

「じゃあね、皐ちゃん」

安奈は呟いた。言葉尻が涙声になっていたが、皐に聞き取る余裕は無かった。その瞳からは自然と涙が零れた。

「……あの、何で泣いているんですか？」

皐に、一人の少女が声を掛けた。その少女の名前は――『唯代安奈』。

「何でもない……」

そう答えることしか、今の皐にはできなかった。

「あの、私、唯代安奈って言うんですけど、えっと、貴女は——」

皐は、自分の名前を名乗ろうとした。だが、急にそれが躊躇われる。もう、自分にその名を語る権利は無いような気がしたのだ。すでにこの世には存在しない『唯代安奈』の親友の名など、もう自分の名前ですらないような気がした。

「……セピア」

「へ？」

皐は、無意識の内にそう答えた。

「私はセピア——色褪せた人形」

そう呟くと、涙が再び溢れ出る。

これ以上、何も喋れそうには無かった。

——そういった内容の過去を、喫茶店の椅子に座ったまま思い出していたセピア——小見原皐。

セピアは、自らの肉体も人形に近いものにした。半人形とも呼ぶべきものだろう。無機物人形のような不老は手に入らなくとも、長命を手に入れた。そして何度も——別の存在として安奈を生き返らせる手段を探していた。

しかし、それは全て失敗に終わった。その複雑な術を試す度に、安奈は別の安奈として生まれ、術の反動で急激に寿命を縮めた。今回が最期だったのだ。術を試して、無事でいられるほどの寿命が残っていたのは。

セピアは安奈の方を見る。机に突っ伏して眠っている。寝顔を横から覗くと、まるで生きているようでもある。

しかし、安奈は間違いなく死んでいる。

セピアは安奈の死体にすがりつき、再び眠りの世界に落ちようとした。しかし、予想外のものがそれを邪魔する。セピアの身体が勢いよく倒れた。まるで、何かに滑ったかのように。

自分がもたれ掛かった安奈の身体を見るセピア。——肉が腐っている。もう肉体として存在することすら限界なのだ。セピアが体重を掛けた瞬間、その部分の皮膚が剥がれ、表面の肉と一緒に崩れていったのだ。

「——間に合ったな」

水鶏の声。突然喫茶店の中に姿が現れる。

「……何が、『間に合った』のよ」

セピアは、怒りを押し殺しているために震える声で言う。

「もう——腐って崩れ始めるわ。足や手からはじまって、最後は頭」
「俺はそれを止める為に来た」

水鶏は制するように言葉を挟む。

「俺は——自分と自分の触れる存在に、『理を歪めさせないようにする』能力がある。例えば俺がお前の体の一部に触れていれば、お前が限度を超えた術を使っても理は歪まない」

「それは、つまり——」

「そう、俺の力があれば、その人形を蘇らせることができる。お前の実力の範囲内で、なおかつ二分の一の確立だがな」

その言葉を聞いて、セピアは半分安堵し、もう半分は混乱した。さつきまで安奈の処理をしようとしていた男が、何故今になって助けようとしてくれているのか。そして何故二分の一なのか。

「……どうして、二分の一の確率なの？」

自分の疑問をそのまま口にするセピア。

「俺の力は不安定だ。五割の確率でしか発動しない」

「——もし、発動しなかった場合は……？」

「この星の制裁作用によって消えるだろうな。俺もお前も。そして理も歪むだろうが——それは大丈夫だ。理の修復が可能な能力者に、もし失敗した時の処理を頼んでおいた」

水鶏はそう言うのと、一步踏み出しセピアに近づく。そして、その手を差し出した。あの湖の辺で、鷺が優しく握った手だ。

「あとは、お前が安奈を生き返らせる可能性の為に命を掛けられる

か。それだけだ」

「……私の力じゃ、完全に生き返らせることはできないわ」

「それぐらい知っている」

水鶏は、まるでその容貌に似合わない朗らかな笑顔を見せる。

「ただ、もう一度、別の唯代安奈をこの人形から作ればいい。きつと僅かな命しか持たないだろう。十年、五年、或いは一年ももたないかもしれない。しかし——一日でも時間があれば、壊してしまつた五十年の時をやり直せるはずだ。一人の唯代安奈という人形に、一人のセピア——小見原皐という人間として接することができるはずだ」

「でも、それじゃあ、まるで自己満足だわ」

セピアは躊躇う。差し出された、自らの死さえも厭わない救いの手を握り返すことに。

「確かにそうだろう。だがこの人形は、ずっと唯代安奈の魂を共有してきた。そして今度作り変えてもそうなるだろう。お前にとっては自己満足でも、唯代安奈の魂にとっては最後の幸福と成り得るはずだろう？」

「……ずっと昔に言っていたわよね。魂なんて信じないって」

「お前は信じないのか？」

「——信じたいわ」

そう言つと、諦めたようにセピアは手を伸ばす。そして、しっかりと水鶏の手を握り返す。

その瞳に、迷いの色は無い。

「……そうだ、もう一つ言わせてもらいたい」

水鶏は立ち上がるセピアに向けて、さらに言葉を重ねる。

「命を掛けているんだ。自己満足でも許されて然るべきだろう？」

「——確かに、そうね」

水鶏の言葉を受け、笑みを零すセピア。

そして、足の先が崩れて土の様に変わり始めてしまった安奈を見て言つ。

「——今までの全ての罪を許してなんて言わない。自己満足の為に蘇らせる罪も許されるとは思っていない」

呟きだしたのは、決意の言葉。願いと希望を強く信じると決めた者の言葉。

「けれど——その分以上に、きっと貴方を幸せにしてあげられる。だから安奈……お願いだから、もう二度とこれからの二人の時間は壊さないって約束をするから——もう一度だけ、その目を開いて。私の名前を聞いてよ。教えてあげるから。色褪せた人形の本当の名前を——」

言葉を言い終わる直前、セピアは水鶏の手を握っていない方の手を持ち上げる。そして何かに集中するかのようにして瞳を閉じる。すると、辺りに光が生まれ始める。光達は赤や黄、青に緑といった鮮やかな彩りをしており、それらの舞う部屋の中は、まるで幻想や夢のような光景となっている。そこに、真つ黒な服装に身を包んだ男と、まるで普通の女性が手を繋いで立っているのである。

「——セピア」

水鶏は不意に呟く。光は隙間無くそこに溢れ、もう眼前に空間すら認識できないほどだ。そんな状態の中、水鶏はセピアのいるはずの方向に少し首を向ける。

何かを感じたのか、セピアはその水鶏の方に振り返る。当然、セピアからも水鶏は見えない。

「——お前は取引をしようと言ったな」

「ええ。私の力を、貴方に譲る。その代わり、安奈を生き返らせて、って」

「何故、助けてくれとは言わなかった」

最後の確認、とでもいうような声。それをしっかりと感じ取り、そして一切の迷いも無くセピアは答える。

「生き返った安奈を、私が助ける。たとえ、もう力が残っていないか
つたとしても。——そんな感じ」

水鶏が笑ったように感じるセピア。そして、それは正解だった。

「もしお前が『助けてくれ』と言っていたならば、俺は間違いなく取引に応じていた。だが、お前の台詞の中に、罪の連鎖の中へと落ち込んでいきながらも消えない信念を感じた。だからこそ、こうして無条件で助けることを選んだ」

「そのせいで、確率は二分の一だけだね」

セピアはからかうように言う。それと同時に、自分のどこにそんな余裕があるのだろうと思った。もう力の使いすぎで、意識など吹飛んでしまいそうだ。身体はまるで水の中にいるように重い。それでも立って、こうして力を使い続けているのは、ただ安奈を助けたい一心と、水鶏の不思議な存在感のおかげだ。

「——まあ、そう言うな。きっと上手くいく」

水鶏は水鶏らしくない言葉を洩らす。楽観視をする男でも、現状を見定められない男でもない。ならば、水鶏のこの台詞が意味するところは——

「——もう、お前一人で大丈夫だ」

「え——？」

何が、と聞き返す前に、水鶏の手がセピアから離れる。そしてその瞬間に、光が弾け、中から純白の強い光が溢れ出る。世界一面はその光で塗り潰され——それ以上のことを知覚する前に、セピアの意識が遠くなっていく。

——花畑に、女性と少女が寝転がっている。そしてその安らかに眠る寝顔を一組の男女が覗き込んでいる。

水鶏と鷺だ。

「……ねえ、水鶏」

「なんだ」

水鶏の手には、火傷のような痕がある。

「どうして、この二人をこっちの世界に？」

鷺はそう尋ねる。花畑の離れた場所から、そつとユグが頭を出す。そして一声、狐と鳥の間のような甲高い鳴き声を響かせる。

「ここなら、色々やり直し易いだろう。この世界には——いろいろなものがある」

「そうだね」

鷺はそう呟くと、微かに微笑んだ。——まるで、そこに眠る二人を慈しむかのように。

「でも、こんなことばかりしてたら、そのうちここも人間でいっぱいになるよ?」

「安心しろ。俺が連れてくるのは変わり者だけだ」

「もう……ここは水鶏と私の秘密の世界なのに。そんなに簡単に他人を連れてこないでよね」

「我侬を言うな。世界ぐらいもう一つ探せばいいし、そもそもここは俺の世界だ。お前になんか所有権はないぞ」

「またそんなこと言うんだもん。酷いよねー、ユグ」

いつの間にか足元に駆け寄ってきていたユグに、鷺は話し掛ける。キィ、と鳴き声が響く。

「——さあ、ここを離れよう」

「え、どうして?」

「目覚めて最初の瞬間ぐらい、二人にしてやらないと。——やり直せないだろう?」

「——なるほどねえ」

鷺は心底納得したような声を上げる。

そして、まずは水鶏がそこから立ち去る。その背中を、鷺が「待つて!」と言いながら追いかける。状況がよく分かっていない様子のユグは、眠る二人と立ち去る二人を交互に見比べ、最終的に立ち去る方に付いていくことを決める。

すう、と風が吹き込んだ。

「——ん……」

セピアは目を開ける。そこには空が広がっている。真つ青だ。一度でさえ見たことのないような、完全に透き通った美しい空。

空を何秒か寝惚け眼で見詰めた後、身体を起こす。自分が倒れているということには、空を眺めているうちに気付いた。

「あ、目が覚めたんですね」

聞き覚えのある声。しかし、今まではむしろ自分が言っていたような言葉。

「安奈——」

安奈が、生きている。

そして、セピアの傍らに座っている。

その当然のような光景に——セピアは涙のような熱い何かが、胸の中からこみ上げてくるのを感じる。

「あれ、どうして私の名前を知ってるんですか？」

今までのようにはいかないようだ。セピアはそう思う。それと同じに、初めて『唯代安奈』と出逢った時も似たような経験をしたことを思い出す。あの時と同じく、安奈には完全に記憶が無い。

しかし、今眼の前にいるこの少女は確かに安奈だ。

何度も出会い、何度も恋をした。

セピアの瞳から自然と涙が零れ落ちる。

「——へ？ あれ、あの、どうして泣いちゃったんですかっ？」

安奈は慌てる。眼の前の女性が——最低でも自分の思いつく限りでは——特別な理由もなく泣いたのだ。困惑するのは当然だ。

しかし、そんなことは今のセピアにとってどうでもいい。関係ないのだ。

「あ——」

安奈の身体はセピアの腕に囚われる。セピアはもう二度と離すまいと、その腕の中の人形を強く抱き締める。——もう、セピアにとって唯代安奈は人形などではない。ある意味での命に等しい存在なのだ。

「——あの、何ですか」

安奈は戸惑いながらも尋ねる。

「……私は——小見原皐」

セピアは——皐はやっと、己の名前を解き放つ。

「貴女が——唯代安奈が好きなのよ——」

過ちを犯した魔術師は涙を流す。

過ちに囚われた人形は幸福を取り戻す。

たとえそれを世界が否定しようとも。

きつともう、過ち迷わないだろう——。

A n t C o n f i d e n c e (後書き)

本編の第一話となるこの作品。まるでハッピーエンドを迎えたようですが、話はまだまだこれからです。

例えば恋物語はその恋の終わり、つまり二人が結ばれるのが終わりです。

けれどこの作品は命がテーマ。

命の終わり——それは死か、それとも別のものか。

区切りごとに、何らかの形でそれを書いていこうと思います。

Bend the past

「臯さん！」

遠くから、女の子の呼び声が聴こえて来る。聴き慣れた、けれど聞き飽きることのない声。

「臯さん、返事してください！」

次第にその声は近づいてきて、草原の青い草を踏み越え、輝くような風と共に私の傍らまで寄ってきた。

「もう、どうして返事してくれないんですか」

私のすぐ隣に、少女が立っていた。暖かい緑風と共に来た少女。

名前は安奈。唯代安奈。

私の、最も大切な人。

「空を見てたのよ」

「空？」

「そう、空」

@私はそう言うのと、再び空を見上げた。そこにはまず、翼のように大きく広がる雲があった。視界の隅ぐらいにはヴェール状の雲があつて、大空を天使や神のように着飾らせていた。

「綺麗でしょ？」

「はい。正直、私はもう見慣れちゃいましたけど」

安奈はそう言つて、私の横に腰掛けた。

「やっぱり、それでも綺麗だつて事ぐらいは分かります」

そう言いながら、空を見上げて微笑む。その姿がどうしようもなく愛らしくて、そして純粹で奇跡的なもののように思えて、どうしても守りたい、と強く想う。

私は足元の草を撫でた。ただの雑草。何度踏まれても、強く立ち直る雑草。季節が夏だからなのか、それらは皆青く深く生茂り、普段よりも少しだけ天に近づいているような気がした。

どんなものでも、必ずと言つていいほど天を目指す。海は雲、そ

して雨になり、地上に返されてもまた川となり、海に戻って再び天に昇る。木々は年を増すごとに大空との距離を縮め、命は海から陸へ、そして鳥になってあの蒼の中を泳ぐ。そんな中、まだ大地に取り残された人間達は、どうにか空に昇ろうと足掻いて生きている。

そう考えれば、私もその内の一人だ。

空を見上げる。それが空を求める証拠だ。空と共に在るのだとすれば、見上げる必要なんてないはずだから。

「——そういえば、安奈」

私は、ふとあることを思い出して口を開いた。

「何ですか？」

安奈は空から視線を外し、私の目を向いて答えた。この瞬間。たったこれだけのことが、私を空に等しい高さまで舞い上がらせる。

「水鶏と鷺が、今日中にここまで来るらしいわよ」

「本当ですか？」

安奈は喜んでいて。それが嬉しくて、私も喜んだ。

「本当よ」

「やった！」

そう言つと、安奈は立ち上がってどこかに駆けて行った。

「どうしたの？」

私はその背中に問い掛ける。

「『地鏡の扉』まで出迎えに行くんです！」

振り返り、後ろ向きに走りながら答えた安奈。思わず笑みが零れる。

「……もう、いつ来るかなんてまだわからないのに」

私は多分、笑いながらそう呟いた。

私と安奈は広い湖——『地鏡の扉』の辺に座っていた。少しすると湖が淡く輝き始め、霧のようにふっと人影が現れた。それはゆっくりと湖の上を歩き、私達の方に近づいてくる。

「やあ皐、それに安奈。久しぶりだな」

光の中から現れた人物は、黒いコートに黒い帽子を被った、肌が異様に白い青年。――水鶏だ。

「おひさしぶりです、水鶏さん！」

安奈は立ち上がって挨拶をする。元気なその姿を見てると心のどこかが温かくなって、私は小さく笑みを零した。そして続くように立ち上がり、

「鷺はどうしたの？」

と水鶏に尋ねた。

「あいつは速いからな。寄り道をして、あらぬところから出て来る」

「まあ、いつものことよね」

「その通り！」

私の隣で安奈とは違う元気な声が上がる。その方を向くと、赤い眼の少女がいた。水鶏とは対照的に、純白の衣に身を包んでいる。

「あら鷺。ひさしぶり」

「おひさー」

そう言って、ひらひらと手を振ってみせる。

「安奈もひさしぶり」

続いて、私を挟んで安奈のほうに話し掛ける。

「うん、ひさしぶり」

二人とも、満面の笑みを浮かべていた。

「……どうした、皐」

水鶏が私に話し掛けてきた。

「何？」

「随分楽しそうだな」

言われて私は、自分も笑っていることに気が付いた。

「ええ。楽しいって言うよりは、嬉しいのかもね」

「なるほど」

水鶏からそれ以上の言葉は漏れなかった。

「お客さん？」

安奈はその言葉の意味がよく分からない様子で、首をかしげながらも楽しそうに笑っていた。

「そう、お客さん。明日ね、ここまで来て、安奈ちゃんも一緒に手伝って欲しいことがあるんだって」

「ふうん、そうなんだ」

だが、私にはわかる。その言葉が、一体何を意味しているのか。

この場所は、水鶏と鷺が見つけた『ただ唯一美しく残った場所』らしい。そこを世界から隔離し、美しいまま残しているのだそうだ。私と安奈は、お互いもう寿命が長くない。私はあと二十年か三十年ぐらいで死んでしまうだろう。安奈はもっと短く、あと十年も無いかもしれない。だから、せめて最後までは幸せに過ごせるよう、と水鶏が用意してくれたのがこの場所だ。

けれど、その代わりに条件を出してきた。

それは、『プラネットインフレイションを防ぐ鍵となること』だ。プラネットインフレイションとは、惑星崩壊とも呼ばれる現象だ。私や水鶏、鷺に安奈のような『能力者』が理を歪めてしまうほどの現象を起こした際、その歪みが一定量以上集まるとこの星は爆発してしまう。限度を越えた術に対する、星自身の浄化作用によって。

とにかく、私と安奈はプラネットインフレイションを防ぐ為にここにいる。安奈はそのことも含め、自分が能力者であることも知らないけれど、ここにいるためにはプラネットインフレイションを防ぐ鍵となるという条件を飲まなければならない。

だが、その条件も飲まずにここへやってくる人物。

それは、プラネットインフレイションの発生する可能性を示しているのだ。

もちろん、本当にただの客なのかもしれない。けど、鷺が「手伝って欲しい」と言ったことや、水鶏が私達以外の人間をここに連れ込んできたことが無いこともあわせて考えると、その可能性は信じ

たくないくらいに高い。

「水鶏、もしかして——」

私は安奈に聞こえないよう、小さく水鶏に尋ねた。

「そうだ。その時が来た」

やはり、嫌な予感は当たっていた。

「プラネットインフレイションは、あとどれくらいで起きるの？」

「分からない。だが、理の歪みが大きすぎる。悠長に構えているわけにもいかないのだ」

なるほど、あくまで未然に防ぐ、ということなのだろう。

「手順は後で話す。今は、安奈の相手でもしていてくれ」

水鶏は相変わらずの言い草だった。結局の所、この男は『考える時間をやる』と言っているのだ。あくまでも上の立場からではなく、対等な位置からの言葉。それが、水鶏が喋る時の特徴だ。

ただ、あまりにも遠回り過ぎて、逆に高圧的になることもあるけれど。

「ありがとう、水鶏」

私はお礼だけ言って、楽しそうに話す安奈と鷺の方へ歩み寄っていく。

——安奈と鷺は、花畑で『お客さん』の為に花の冠を作っているところだ。花を抜いても大丈夫なのか心配になって水鶏に訊いてみた。

「本当に、誰かの為を想って作るのなら問題ない」と返された。

この世界はとても穢れに敏感だ。ただ可愛いから、という理由で花を摘み、冠を作っていれば、きっとすぐに花畑は駄目になってしまう。今のような綺麗さはなくなってしまう。

「——来るぞ」

私の隣に立つ水鶏がそう呟いた。

私と水鶏は、『お客さん』がここに来るのを待っていた。それはもちろん、すぐにプラネットインフレイションを防ぐ手段について相談する為だ。

次第に地鏡の扉の湖面が輝き始めた。水鶏と鷺がやってきた時と同じように。

その光が強くなり、そして突然、ふっと霧のように姿を現したのは――

「――弥生？」

そこにいるのは、以前の安奈と友達だった少女、弥生だった。

「お久しぶりですね、セピアさん」

私は古い名前を呼ばれ、胸がどきりとした。

「ごめんなさい、弥生。私は今はセピアじゃなくて『皐』なの」

私の訂正に不思議そうな表情を浮かべる弥生。

「そう、ですか？ それじゃ皐さん、お久しぶりです」

「ええ、久しぶりね」

そう言って、そこで初めて私と弥生は握手を交わした。

「……そうか、君たちは知り合いだったな」

水鶏は急に思い出したように呟いた。多分、この言い方は本当に忘れていた時の言い方だ。

「水鶏、それよりも――」

「ああ、そうだな。説明が先だ」

自分に言い聞かせるように水鶏は呟いた。

「皐は知らなかっただろうが、弥生には光と話す力が在る」

「光と、話す？」

「正確には、光という媒体を介して、その内部の情報を読み取る能力だ」

それを喻えて、弥生は光と話す能力、と呼んでいる。水鶏はそう付け加えた。

「……その力の、どんな部分がプラネットインフレイションを防げるというの？」

「まあ、聞け」

そう言つて水鶏は私と弥生に説明を始めた。

「まず、弥生に光から理の歪みがある場所を聞き出してもらつ。これは理をゆがめるほどの力は使っていないので、まあ構わない。次に、その情報を僕の第一の能力、『情報伝達』で鷺に伝え、鷺にはこの場所まで歪みをゆつくり、少しずつ動かしてもらつ。――ああ、鷺には理の歪みを動かす力が在るのだ。まあ、量が膨大ではあるが、徐々になるのでここでもまた理を歪める事は無い」

その口調から、大体の話の展開が分かった。

「……まさか、私と安奈に『人形』を作れと？」

「そうだ。大量の歪みを素材にし、この空間と対等なほど美しい見た目と心を持つ人形を男女で一对作ってもらつ。この段階で理を歪めてしまうので、僕の第二の能力『理超越』を使い、理を歪めさせないようにする」

確かに、そうすれば完璧だ。完全に作り変えた人形は、人間と殆ど変わらない。世界中の理の歪みが一对の男女になれば、後はこの世界で自由に生きてもらうだけだ。生まれた人形がまた理を歪める可能性も低くなり、また水鶏たちが管理するのにも最適な場所だ。この場所を美しい場所として残しておくために、心と外見を美しく作るのは必要なのはよく分らないけど。

「この計画では、鷺が理の歪みを集めるために二日かかる。その間に、君から安奈に人形の作り方を教えてやつてほしい」

水鶏はそう言つて私のほうを見る。私は安奈のほうに目を向ける。どうやら状況が把握できていないらしく、呆けた顔で話を聞いている。当然だ。安奈には過去の記憶が無いから、人形を作る力のことはもちろん、特別な力についても何も知らない。

だから突然こんな話を聞かされても理解はできないだろう。

「二日はいくらなんでも短すぎるわ」

「しかし、期限がない」

呟く水鶏の表情は、どこか辛そうだった。

「……何か、理由があるのね？」

私がそう尋ねると、水鶏には珍しく何の言葉も発さずに頷いて答えた。

「分かったわ。どうにかしてみる」

「すまない」

さりげなく放たれた謝罪の言葉にも、どこか水鶏らしくない雰囲気があった。普段はどこか軽薄そうな口調なのに、今日の今に限って感情が表に出ている。そんな感じだった。

その日の夜。安奈に人形の作り方や力の存在などを教え終わって、何もやることが無くなった。けれど安奈みたいにすぐ眠気がやってくることはなく、私は夜の草原をぶらぶらと歩いていた。

なんとなく歩いていくうちに、地鏡の扉の近くまで来ていた。月の光を返す湖の表面は、まさしく鏡のように滑らかだ。魂の奥まで映し出されてしまうような気さえしてくる。

ふと、辺に人影が座っているのが目に入った。月明かりに映る顔の色は青白く光っているようにも見える。水鶏だ。

横顔からも、何かを考え込んでいるのが見て取れた。これほど深刻そうにしているのを、私は一度も見ることがない。

そっとしておこうと思ったけど、私は気持ちに反して水鶏に近づいていく。足音が気配を感じ取ったのか、すぐに水鶏は私に気付いた。

「どうした、明日も安奈の特訓があるだろう。眠っておかなくていいのか？」

「ええ、今日はね」

そう言って水鶏の隣に座る。水で冷えた空気がゆったりと動く。その流れが肌をくすぐって心地いい。

「前から訊こうと思ってたけど、この世界って何なの？ 私たち以外の人間はいない。人工物って言えば、この湖に沈んでるあの柱ぐ

らしいかない」

私は湖の真ん中に沈む巨大な柱を指して言う。神殿とかに使われていそうなデザインの柱だ。それが、半分ぐらい湖面から姿を現して、斜めに横たわっている。

「たった一つ貴方が教えてくれたのは、ここが『世界に唯一残った美しい場所』ってことだけ。これじゃあ、あんまりよ。何も分らないままだわ」

問いかけても、すぐに返事が返ってくることは無かった。水鶏はただ湖面をぼうつと眺めている。凍ったように青い月の光の中、時だけが流れていく。

やがて、水鶏が口を開いた。

「——昔、俺はまだ人間だった。鷺も、何の能力も無い普通の人間だった」

そうして出てきたのは、質問とは直接関係のない言葉だった。

「ある時、俺は『悪魔』に出会った。その悪魔が、俺に力と、不老とも言える長い寿命をくれた。しかし、その対価は俺からでなく、鷺から奪われた。それで——俺たちは、その悪魔を探す旅に出たんだ」

悪魔、とは本当の悪魔なのか。それともただの喩えなのか。どちらにしても、真つ当な存在ではなさそうだ。

「旅の中で、いろいろなことがあった。しかし、最後にはやっと、俺は悪魔から鷺の奪われたものを取り返した」

奪われたもの。それが一体何なのかは分からない。けれど、水鶏の声色からそれがとても大切なものだというのは分かる。

「だがその悪魔は、俺に殺されるより先に——自らの命を対価にして、鷺に『呪い』をかけた。百年の眠りの呪いを。鷺は百年の眠りの後、一年間だけ目覚める。そして時が来ればまた眠りにつく——そんな呪いだ」

「……そうだったのね」

私の中で、いろいろなことが繋がった。水鶏がもう時間がないと

言った理由。それはきつと、鷺の眠りにつく時が近づいているからなのだろう。そして辛そうにしている理由は、鷺との百年間の別れ。「この土地は、鷺と俺で見つけた場所だ。世界で唯一綺麗なまま残った場所。時間の流れを世界と共有しながら、空間的連続が絶たれている土地。俺と鷺は百年の間に変わった世界を見て周り——そして、いつまでも変わらないこの場所で休むんだ」

そう言くと、水鶏は立ち上がる。

「だが、ここはもう俺たちに必要ない。鷺が眠れば——その間に、また俺が新しい土地を探す。だからここは、もう次の人に明け渡すさ」

次の人。それはきつと、今度私と安奈で作り出す人形のことだろう。

「大丈夫？」

「もちろんだ。俺たちは、もう何度だってこれぐらいの悲しみは越えてきた」

水鶏の口調は元に戻っていた。

「これから何度でも、同じような、あるいはもっとひどい悲しみが訪れるだろう。だが、それら全てを俺たちは乗り越える。そうしてささやかな、ほんの僅かの幸福を手に入れられる。それだけだ」

そう言くと、水鶏は一人でその場を立ち去っていく。悲しみや苦しみ、そんな全てを背負っているはずの背中、決して挫けそうにない。確かに水鶏は、これまでの悲しみ全てを乗り越えてきたらしい。そして今もまた。

「……明日に備えて眠りましょうか」

私はそう呟き、静かに湖の辺から離れていく。

「——できました！」

安奈はそう言って、とても嬉しそうに私のほうへ駆け寄ってくる。「臯さんの教えてくれたとおり、人形が動くようになりました！」

安奈の手には一体の人形——私が生み出した、身体だけの人形が乗っている。しかしその人形は、まるで魂があるかのように自由に動いている。時々安奈の手から落ちそうになると、必死になってバランスをとる。その仕草のいちいち人間臭いところから、安奈が人形の『心』を生み出したのだと理解できた。

「すごいわね、安奈。もうこんなに上手く創れるなんて」

「はい。なんだか、誰かに引っ張られるみたいなきがしたんです。それで、その通りにやったら上手くいきました」

確かに、人形を作るときは誰かに引っ張られるような感じがある。コツをあっさり掴んでいる安奈に、私も正直驚きを隠せなかった。

「すごいわ、安奈。本当に」

「えへへ、ありがとうございます」

嬉しそうにする安奈の頭を撫でてやる。

一度創り方を覚えれば、もう難しいことは何もない。大規模なものを創るのにも、ただ力を強く使えばいいだけだ。これからの計画を円滑に進めるには、創り方を覚えるだけで充分。何も特別な心を創ろうとしているわけじゃない。

「これでプラネットインフレーションも防げるわね」

「はい！……ところで、プラネットインフレーションって何ですか？」

そういえば、安奈にはまだそのことは説明していなかった。

「簡単に言くと、世界が滅びてしまう現象よ。私たちみたいな能力者が、能力を過剰に使うことで世界に負担がかかって、最後には星が爆発してしまう」

実際はそんな簡単な話ではないけれど、今はこれぐらいの説明で充分だろう。

「怖いですね、それ」

「そうね。だから私たちが防ぐのよ」

安奈は小さく拳を握り、何かを決意したような表情で、
「わかりました。なんとしても防ぎます！」

と力強く宣言する。その様子がおかしくてそれに可愛らしくて、私はつい小さく笑いをこぼしてしまう。

「あ、どうして笑うんですか」

「だって今の安奈、すごく可愛かったもの」

からかう感じに言っていると、なおさら安奈がむきになる。

「もう、臯さん！」

正直言つと、私は怖かった。

もしもこの作戦が失敗すれば――プラネットインフレイションが防げなければ、私たちは死んでしまう。その事実にはどうしても拭いきれない怖さがある。

死、それ自体には何の恐怖も無い。もう今まで幾度と無く捨てようかと迷った命だ。これから実際に消えるかもしれないとなっても、麻痺した感覚はそう簡単には戻らない。

けれど、安奈は違うだろう。死んでしまうのは怖いはずだ。そもそも私たちは、失敗すると死んでしまうことを教えていない。安奈は何も分らないまま、その命を無に散らすのだ。

どうしてそれが耐え切れるだろう。私の身勝手に生き返らせて、死んで、それを繰り返し返させてきた。やっとそんな連鎖を切ることができたのに、結末はただの死。安奈が辛いかどうかじゃない。安奈に辛い現実を与える自分が嫌だ。

けれど――私たちがやらなければ、世界は滅びる。

仕方ないから、他に道がないから、私は安奈の道を勝手に定めた。これじゃあ、今までと何も変わっていない。

そう――思っていた。

でも、今は違う。

私は確かに安奈の道を勝手に定めた。死の可能性を孕んだ道を、そうとも知らせずに歩かせた。過ちと言えば過ちかもしれない。

けれど、それを恐れる理由にはいけない。怯えて立ち止まっ

てしまえば、このまま何も変わらなくなる。選んでしまったことを後悔しても、たった一つの事実だって変わらない。

できるのは、これからの現実をよりよく変えていくこと。今までが変わっていなくても、次を変えればいい。それができないかもしれない恐怖は捨てる。できなかった過去の苦しみも乗り越える。

今からできること。

それはもちろん、世界を必ず救うこと。

そうしていよいよ時は来た。

「——私が集めた歪みは、地鏡の扉から通じている空間の狭間に全部置いてあるから」

そう言つて、鷺が地鏡の扉を指し示す。

「地鏡の扉を介して歪みを人形に作り変えるの」

「つまり、歪みを直接この世界に持つてくるわけにはいかなかったのね？」

鷺は頷く。水鶏はその隣で、ただ静かに佇んでいる。

「水鶏の手を握つていてね。そうしないと、星の力で消されちゃうから」

「まあ、必ず防げると言うわけではないが」

しかし、その言葉には自信があつた。やはり、水鶏はもう迷うことも引くこともしないらしい。

「弥生は？ もう用事が無いから帰つたとか……」

「今は別の作業のためにこの場所からは出ている。それが終われば戻ってくるだろう」

それ以上は何も聞く事がなくなったので、私たちは作業に取り掛かることにした。鷺は邪魔にならないためか、私たちから離れていく。湖のほとりに立つのは、私、水鶏、そして安奈の順番。私は水鶏の手を握る。それに続いて安奈も手を握つた。

「……今から地鏡の扉を開く」

そう言って水鶏が目を閉じる。次第に湖面が白い光を放ち始める。それはまばらに綿のように現れ始め、そして数が増えると雪のように湖面を覆った。それでも溢れる光の綿は、漂うように宙を舞う。
「いいぞ。繋がった」

水鶏はそう言って目を開く。私と安奈は顔を見合わせ、同時に頷く。そして湖の方に空いている手を翳し、集中する。

やがて、光の向こうに手ごたえを感じた。絹糸を手で風ぐような感覚。ゆらゆらと逃げ揺らめくそれは、間違いなく理の歪みだ。

「安奈、見つかった？」

「はい、ありました」

どうやら安奈も歪みを掴んだらしい。私はそれを確認して、人形を作り始めた。

この世界にも劣らないほどの美貌の男女——そんな抽象的なものでも、これだけ術の規模が大きいと創ることが可能になる。

ただ、それに加えて『完全』な人形を作らなければならない。これはさすがに難しい。心は純粹なだけでいいので、むしろ安奈が作るべき人形の心は単純で容易に作れる。一方完全な体には様々な付加価値がある。そしてそれら全てに調和を必要とする。結果として、かなり高度な術になる。

なんにせよ、どちらも世界に本来存在しないものを生み出すのだ。大きく理を歪めるはず。そして星からの制裁が下る。それを回避するため、水鶏の力で理を歪めないようにしているのだ。

今のところ、制裁は下っていない。どうやらうまく水鶏の力が働いているようだった。

次第に人の形が出来上がっていく。輪郭だけでも美しいほどの出来栄だ。この調子で完成させなければならない。けれど急げば集中力が途切れて失敗してしまう。半端なままで人形を残せば、それが大きく理を歪めるだろうから、確実に制裁が下る。そばにいる私たちも巻き込まれて消滅してしまうだろう。

私はより力を込めた。それ自体には特に意味はない。けれど、そ

うして集中を維持していないと意識が飛んでいきそうだった。

「――皋さん」

不意に、安奈が呼びかけてきた。

「私、頑張りますから」

私は返事を返す余裕なんてないのに、

「ええ、頑張つてね」

と答えた。

次の瞬間、白い光が爆発した。視界が全て白く塗りつぶされ、何も見えなくなる。一瞬失敗したのかと思ったけど、違った。人形が完成したのだ。私と安奈で作った、限りなく人間に近い一対の人形が。

そして、次第に視界は晴れていく。

湖の辺には一組の男女が眠っている。どちらもとても美しい身体に一糸も纏わない姿で横たわっている。私と安奈の力で創った人形だ。やがて目覚め、それぞれが何らかの思いを抱いて生きていくんだろう。それは人間と一切変わりなく――もしかすると、人よりも純粋で美しいかもしれない。あの二人はとても綺麗な世界で、煌く日々を送っていくのかもしれない。

私はそんな二人の人形を、ずっと遠くから眺めていた。

「――そろそろ行こう。あの二人が目覚める前にこの世界から出たほうがいい」

水鶏が呼びかけてくる。私は一度だけ頷き、この世界から立ち去ることに決めた。

「行きましよう、安奈」

どこへ、と語るような安奈の表情を見て、私は続きの言葉を口にした。

「世界中のどこへでも、一緒に行きましよう。そしていろいろな幸

福を探すのよ。私たちがここで過ごした時間は確かに幸福そのものよ。けれど、それだけで幸福が終わりだとは思えない。世界は、探すだけ幸福が見つかるものだと思うの」

「そう——ですね。私も探してみたいです。外の世界の幸福」

安奈は不思議な表情でそう呟いた。まるで遠く離れた異世界を見透かすような、透き通った瞳で前を見ていた。

そこに写るものは、できるだけ綺麗なものであってほしい。私はそう思う。けれど実際はそんなにうまくはいかない。きっと汚いものがいくつも目に入るだろう。これからの私も汚いことをするかもしれない。

そうした事實は——過去は変えられないし、歪めることもできない。

けど、たった一秒後にもより幸せであるように生きてゆけば、未来は変わっていく。過去の傷や痛みも一緒にのまま強くなる。そうして掴み取る時間は、もしかすると過去を変えることよりもよほど価値あることなのかもしれない。

私たちとあの二人の人形の違うところ。それは過去に誰かを傷つけたことがあるかどうか。そして、傷つけられたことがあるかどうか。

そんなものと一緒に自分を誇れるようになった時、私たち人間はどんなに完璧な人形よりも美しい。

「この森をくぐれば、外の世界に出られる。そこで弥生と鷺が待っているはずだ」

水鶏はそう言って、森の中へと入っていく。光が差し込む明るい森。ちょっとした旅立ちにはもったいないくらい立派だ。

「二人が力を使ってこの道を維持している。あまり待たせては悪いだろう」

人形を作った後、水鶏は地鏡の扉を完全に閉じ、外の世界とのつながりを絶った。あの人形が外の世界に迷い出たりしないようにするためだ。そうすると私たちが外の世界に出られなくなるので、二

人——弥生と鷺に外から出口を作ってもらっているのだ。

森の中を進んでいく。やがて光って向こうの见えない場所が現れる。きつと森の終わりだ。私と安奈は顔を見合わせた。そして光の向こうにあるかもしれないものを想像して微笑む。

そして、光へと足を踏み込んだ。

弥生は私たちの姿を見るなり、急に飛びついてくる。

「臯さん、安奈ちゃん、よかった」

改めて私たちの無事を確認して安堵したのだろう。肩の力が一気に抜けるのが見えた。

「——それじゃあ、私はもう行くね」

そう言つて、鷺は水鶏の傍らに寄っていく。そして二人は少しずつその場から離れていく。鷺はこれから百年の眠りについて、水鶏はそれを待ち続ける。鷺はきつと、百年後もまた水鶏が隣にいることを祈つて眠りにつくのだろう。そして水鶏はその願いに答えるように、百年間ずっと鷺のことを待ち続けるはず。

二人には二人の戦いがあるのだ。私たちには私たちの戦いが。傷つけあいながらも、どれだけ苦しくても顔を上げて歩く。

「またいつか。会いましょう」

私は二人の背中に呼びかけた。水鶏だけが片手を上げて答えた。

しばらくそんな二人の姿を見送っていた。やがて姿が見えなくなり、余韻も失せ、世界に満ちる様々なことが輝きを増した。

「——そろそろ行きましょう」

私は安奈と弥生の二人に呼びかける。

「はい！」

二人は声を揃えて返事をする。

過去を曲げることはできないけれど。
失った時間は取り返せないけれど。

真っ直ぐに、前へ進んでいく。

Chain the wish

ずっと遠いところまでやってきたと思う。昔暮らしていた街はもうどの方向かもはつきりしない。ただ、漠然と北の方——そんな記憶だけが曖昧に残っている。

その代わりに、と言うのも何かおかしい気もするけれど、色々なものを見た。たくさんの思い出が増えた。はつきりと断言できる。

私は二人の仲間と一緒に旅立った。素敵なものを探したくて。それに、誰かのことを助けてあげたくて。

かつてひそかに訪れていた、この星の滅びの危機。それはどうにか回避することができた。けれど、世界にはまだまだたくさんの悲しみや辛いことがある。それらを僅かでもどうにかしたくて、人助けをしながら旅を続けている。

そう——例えば、かつての私と安奈のような悲しみを一つでも変えたくて。

「どうしたんですか、皐さん」

不意に、私の隣を歩いていた少女——弥生がそう尋ねてきた。弥生は一代前の安奈との友達だ。その頃に一度会ってからは、世界を救う時まで会うことがなかった。それでも弥生は私と安奈のことを覚えていて、今回の旅にもついてきてくれた。

と言っても、弥生は以前からずっと旅を続けているらしい。だから、私たちと一緒に旅をするには何の問題もない。——と、本人が言っていた。私が迷惑じゃないかと訪ねたときのことだった。

「ちよつと、皐さん！ 弥生ちゃんと呼んでますよ！」

「え、ああ、大丈夫。分かってるわ」

続いて私に声をかけてきた、弥生とは反対側の隣にいる少女。こ

の少女こそ、私がこの世界で他の何より大切な存在、唯代安奈。

「ごめんなさい、ちょっと考え事していたの」

「そうですか。それならいいんです」

弥生はそう言うと、元通り前を向きなおす。

歩き続ける私たち。時々立ち止まって、道沿いの店を眺めたりする。どこにでもある道路。いままで誰が通ったかもわからない歩道。なんの代わり映えもない量販店。国道沿いに並ぶのは、最近流行の店ばかりだ。私が商売をしていた商店街とはずいぶん違う。

「——最近ね、少し考えるの」

私は不意に、隣を歩く二人に向けて言葉を発していた。

「この世界で、本当に生きている人はほんの一握りの人間だけなんじゃないかって」

「それは……どういうことですか？」

疑問を抱いたらしい弥生が、すぐに問い返してくれた。安奈は興味深そうに話を聞くばかりだから、こういう話をする時は少し話しくかったりする。その点では、弥生はとても聡いので話しやすい。

「本当に生きるってのは、本気で生きるってことにすごく似てると思うの。それで、自分のことを考えてみたのね。自分は本気で生きてきたかな、って。けれど実際のところ、本気と呼ぶには程遠かったわ。確かに必死で、一生懸命に生きていた。そのころは自分が本気だって信じていたし、今でも信じたい。けど、必死に生きてるだけでは本気にはならないのよね。今さらになって、本気っていう大きな壁に気付いたの。そうしたら、これからどれだけ必死になっても、自分が本気だなんて思えなくなっちゃったのよね」

難しい話を聞いたように、安奈は急に考え込む。どうやら私の言った言葉の意味を自分の中で探っているらしい。

「それは——自分は生きていない、ってことですか？」

心配そうに呟く弥生。私はつい笑みをこぼしながら答える。

「違う違う。そんなのじゃないわよ。——本気で生きるのは難しい。誰しも本気という見えない指標を目指して進まなければならぬ」

だから、簡単に真つ直ぐは進めないんだと思うの。けれど今、私は本気で生きようと思う。全力で生きていたいと思ってる。そうやって必死に生きるのが、本当に生きるってことじゃないかしら」

私の言葉に安心したように頷く弥生。安奈はまだよく分かっている様子で、首をかしげて考え込んでいる。

「それで、私は自分以外の人たちのことを考えてみた。世界中の人は本気で生きようとしているのか、って。けど、それは違うって分かった。確かにどんな人も必死で、力の限り生きているかもしれない。ただ、それは今を必死に生きているからで、決して本気で生きることを目指したものじゃない。誰でも必死で、全力で生きていれば、それが本気だって思う。全ての力を振り絞って、身体や心が軋むぐらい頑張って——それが、本気だって考えるのは当たり前だと思っ」

安奈は考えることをやめたようで、私の話をただじつと聴いていた。たぶん、それが一番いい。意味を考えて理解するより、なんとなく飲み込んでしまったほうが、案外自分のものになりやすいこともある。

「けど、やっぱりそれは本気じゃないわ。時には肩の力を抜いて、自然体でいることも大切。折れてしまいそうな心を奮い立たせなくて、危なっかしいだけじゃない。ねえ？」

問いかけを聴いた二人は、一緒に頷いて返してくれる。とても幸せだ。こんなに幸福な時間が、かつて私の人生にあったらうか。

いや、本当はこれまでそんな幸福何度も味わっているのだろう。それに、今の幸福も実はたいしたものじゃないはずだ。

けど、今この瞬間が幸福であることは間違いないことで。

そんなものにありふれた世界はもつと幸福なんだろう。

「私たちがこれまでの旅でやってきたことは、本気で生きるっていうことの指標を教えてあげることだったと思うの。目に見えない、考えても分からない目標だから、殆どの人はそれがあるってことさえ知らないまま生きているのかもしれない。私たちは、せめてそれ

を教えてあげようと思うの。本気で生きようとするのが人間の全てだとまでは言わない。けど、多くの可能性がそこにはあるはずよ。そして、それを選ぶのはそれぞれの人。私たちは、ただ選択肢を増やすだけ。最後には何も変わらなくなつて、それは私たちが選んだ結果。選べなかった結果じゃなければ、それだけで充分すばらしいことだと思う」

話をしている間に、私たちは国道から脇道に入り、街へと足を進めた。車たちの喧騒は遠く、辺りは静かなものだった。国道よりもずっと低い頻度で通り抜けていく車の騒音は、むしろちょうどいい具合で心に響いてくる。排気ガス臭いのはあまりうれしくないけれど。

「それじゃあ、今日も頑張りましょうか」

私の掛け声に、二人は元気よく頷く。

こうして、この街での人助けが幕を開けたのだ。

少年は、呆然と歩いていた。年齢は十歳程度。子供ながらも悩みがあるのだろう。思いつめたような表情で、俯いたまま歩いている。

だから——正面に私たちがいるにもかかわらず、歩みを止めなかった。

「——いてっ！」

当然、ぶつかるわけだ。

「う、ごめんなさ……」

少年はそこまで言うのと、不意に口を噤む。そしてまじまじと私たち三人の姿を眺め始めた。

「あ、怪しい人だ！」

「失礼ね、怪しくないわよ」

私は少年の科白をひとまず否定しておいてから、周りの二人を眺めてみる。弥生はいかにも旅をしている感じの服装だ。珍しくはあ

るが怪しくはない。安奈はどこにでもいるような普通の女の子で、服装もそれらしい服装だ。むしろ私たち三人の中では一番普通だ。

ちなみに私は愛用の魔術師っぽい帽子をかぶっている。それに対して服装は普通。一番怪しいのは、考えなくても私に違いない。

「安奈を除いては」

けれど、心にもないことを口走る私。

「わっ、私が一番普通です！」

慌てて安奈が言い返してくる。少年は呆気に取られている様子で、呆然とした表情で立ち尽くしている。悪ふざけもほどほどに、私は少年に問いかける。

「で、どうしたの」

「え？」

「悩みがあるんでしょう？」

私の言葉に少年は心底驚いているようだ。まさか、見知らぬ怪しい人に内心を悟られるとは思っていなかっただろう。今まで助けてきた人のほとんどが見せた反応だ。

種を明かすと、弥生に光と話してもらい、困っている人を捜し当てただけにすぎない。そしてさりげなさを装って接触し、悩みがあるだろうと言う。ほとんどの場合、これで多少なりと信用してもらえる。光から聞き出した、困っている人というのは、心のそこからの悩みを持っている場合がほとんどだ。なので、多少の警戒心なら無視できる。

「……あんたたちに話しても仕方ないだろ」

「へえ、じゃあ悩み事はあるのね」

「だって、そっちがそう言ったんだろ！」

「でも、貴方の口からはまだ聞いてなかった」

少年は歯切れ悪そうに顔を顰める。子供相手にあんまり回りくどい言い方はやめておこう。無駄に機嫌を悪くさせるだけだ。

「——私たちね、人助けの旅をしてるんだ」

私の言葉が詰まったところで、安奈が上手く続きを口にする。少

年はその内容に反応し、表情をいくらかやわらかくする。

「人助けの旅って？」

「そのまんま。いろんな困ってる人を助けるの。これでも結構たくさんの人を助けてきたんだよ？」

少年の目の高さと同じぐらいまで腰を低くして話す安奈。明るくて、社交的で——『あの日』最後に生まれ変わってからは、本当に『本当の安奈』のようだった。特に、前の安奈と比べたらまるで別人のようでもある。

不思議なことに、私は二人の安奈を別人とは思えない。そして、同一人物だとも思わない。何度も生まれ変わって、その度に違う顔を見せてくれた安奈。それらは全部、『本当の安奈』を異なる面から見た映像だったのかもしれない。誰一人として同じではないけれど、どの安奈も『唯代安奈』であり、区別される存在ではない。

少年に対して気さくに語りかける安奈を見て、私はそんなことを考えた。

——安奈と少年が多少打ち解けたようで、悩みの大まかな形が語られる。

少年は名を小松翔と言うらしい。翔はクラスのとある女子が好きだそうだ。その子は生まれつきの病気のせいで、成人するまで激しい運動は完全に禁止されている。つまり、学校の体育の授業には参加できないのだ。

けれど、今年の翔のクラス担任は変わった先生だったらしい。走らなくていい。何度立ち止まってもいい。そう言って、一カ月後のマラソン大会にその女の子を出すつもりなのだ。

幸か不幸か、翔はその女の子を含めた五人のチームになった。普通のチームは四人で四キロだが、翔のチームは五人で四キロ。アンカーがその少女で、翔は第二走者。第四走者と少女で最後の一キロを半分ずつに分ける。

翔にとっては同じチームになれて嬉しい話だが、ほかのチームメイトは違う。歩くことしか出来ないやつがいる。それだけで、もう勝負に負けてしまうと思っっているのだ。特に第三走者の男子は足が速いので、プライドもある。五百メートルも歩いてしまう時点で、三位以上はまず無理だ。それが原因で、女の子がチームメイトに責められるようになった。

——そんな状況が、三週間以上続いた。マラソン大会は明日。少女は今日病院で検査をして、異常がなければマラソン大会に出場するらしい。

「……で、君はどうして悩んでるの？」

安奈の問いかけに、少年は首を横に振る。

「分かんない。けど、ただ好きな人が嫌な目に遭ってるから、とかじゃないんだ。有田——第三走者の奴にも頑張ってもらいたいし、せめて最下位じゃなくなるくらいは全員で頑張れば出来る」

なるほど、少年の言うことは正しい。五百メートルの歩きがあるとはいえ、クラスでも足の速い人が一人いて、五百メートルの区間もひとつある。これなら、全力を出せば最下位は免れる。それも、少女が走ることなく。それは、とても価値のあることだ。

「じゃあ、どうするの？」

弥生が翔を促す。翔は何かを考えるように俯き、しばらく黙り込む。

「とにかく、あいつに会いたい。んで、話をするんだ。他の奴らのことなんて気にするな、って。気にしてもしなくても走る——ってか歩くんだから、気にしないでいいんだって言ってやりたい」

「じゃあ、言いに行きましょう」

私は少年を促す。しかし、少年は首を横に振る。

「俺、あいつがどの病院で検査してるのか分からないし、多分行っても会えないよ。俺、他人だし」

「だ、そうよ。どう、弥生？」

私はそのまま弥生に問いかける。すると、弥生は瞳を閉じて、何かに集中する。――光と会話しているのだ。

「今なら、大丈夫らしいですよ」

少しの間の後、弥生は瞳を開いて言う。

「じゃあ、行きましようか」

私は合図をするように言う。安奈は翔の目を両手で隠し、弥生は光を私の前に集める。私は光を素材に扉の人形を生み出す。光の扉だ。この扉は、私と弥生の力を合わせて生み出した特別なもの。光が映し出している場所になら、どこへでも行くことが出来る。

弥生がその扉を開く。少女の居場所を知っているのは弥生だけなので、目的地の指定は弥生にしか出来ない。

開かれた扉の向こうに見えるのは病院の屋上だった。屋上から見える景色に、この場所が含まれている。比較的近い場所のようだ。

私は翔を押して扉をくぐらせる。目はすっかり安奈が抑えている。それに続いて三人とも扉をくぐる。そして弥生が扉を閉めると、私は扉を光に戻す。金色の粉のようになって扉は霧散する。それを確認して、安奈が手を離した。

「なんだよ、いきなり……あれ？」

周囲の景色が変わっていることに少年は気付いたようだ。そして辺りを見回す。その視線に、一人の少女の後ろ姿を捕らえて動きが止まる。

「――あ、亜由美！」

そして少女――亜由美の方へと駆け出す翔。亜由美も翔の声に気付いて後ろを振り返る。

「あれ、翔くん。どうしたの？」

「えっと、いや、何となく……」

翔はこの場所に来た敬意を訊こうと私たちの方を向いたが、その目に私たちが映ることは無い。弥生の力で光に手伝ってもらい、私たちの姿を見えないようにしているのだ。

結果として、何の説明の言葉も思いつかなくなった翔は言葉に詰まる。

「何となく……病院に？」

「うん」

「それも、屋上？」

「うん」

二度目の返事で、不意に亜由美は笑う。

「変だよ。それ」

「う、うるさいなあ」

本人も変だと自覚しているので強く言えない。光景はほほえましいのだが、このままでは翔の目的は果たせそうに無い。

私は空気から無色透明の球体を作り出し、それを翔へ目掛けて投げる。ちょうど、翔の肩に当たる。衝突すると、球体は空気に戻って消える。翔は球体の飛んできた方向——つまり私たちのいる場所。翔がさつきまで居た場所でもある。

自分のやるべきことを思い出したのか、翔は顔を引き締めた。

「——あのさ、亜由美に言いたいことがあるんだ」

「なに？」

「ほら、俺以外のチームメイトはみんな文句言ってるだろ、明日のマラソン」

「うん」

「あんまりさ、気にするなよ。どうせ歩かなきゃいけないんだから、気にするよりも気にしないほうがよっぽどましだから。それに、間違ってるのはあいつらのほうだし」

「そんなことないよ」

亜由美は首を横に振る。

「私みたいな人が入って邪魔なのはみんな一緒だから。嫌がるのは当たり前だよ」

「でも、それって亜由美のせいじゃないだろ」

「それはそうだけど……」

「なら亜由美に文句言うのは間違いだ」

翔の断言するような言葉に、亜由美は驚いたような表情をする。そして、再び笑みを零す。

「ありがとう、翔くん」

「ま、まあな」

翔は照れたように視線を逸らし、頭を掻く。

そのまま二人の間には沈黙が流れる。翔が何か言おうかと戸惑っているが、亜由美は普通に黙っているだけだ。

「——私ね、走るかもしれない」

そして、急に亜由美がそんなことを呟く。

「どういうこと？」

「もしもビリになるかならないか微妙な感じだったら、少しだけ走ろうと思う。体には悪いけど、勝てるかもしれないなら大丈夫」

「大丈夫じゃない！」

翔は怒るような声で言う。

「もしもお前が倒れたりしたら、だめだ。それに、危険だろ？ 走っちゃ駄目なんだろう？」

「うん……今日も先生に絶対に走るなって言われた」

「だったらお前は無理するな。そんなもん、俺たちがするから。お前は絶対に歩け」

はつきりと、強く言う翔に、亜由美は促されたように頷く。

「よし。じゃあ、約束だぞ？ 絶対に歩けよ」

「うん、分かった」

最後に確認すると、二人の間には再び沈黙が流れる。翔は言うべきことを全て言い終えて、満足したような表情をしている。反対に、亜由美は戸惑うような表情を見せている。先ほどの沈黙とは立場が逆転していた。

「——じゃあ俺、説得に行ってくる」

「え？」

不意の翔の宣言を、亜由美は聞き返す。

「言つたろ、無理なんて俺たちがするからって。他のチームメイトにも無理してもらつように頼みに行くんだよ」

「そんな、悪いよ」

「いいんだよ、今日までお前に悪いことしてきたんだから。これであいこだ」

そう言つと、翔は屋上から屋内に戻る扉の方へと戻っていく。

「んじゃあ、また明日な」

「う、うん」

最後は亜由美がずっと戸惑い続けていた。翔は自分の勢いのままその場から姿を消す。亜由美一人が屋上に取り残される。

私たち三人は、それを確認すると再び光の扉を作つてその場を離れた。

自分でも不思議に思うことがある。私は多くのものを失つた。幾つか取り返したものはあるけれど、ほとんどは失つたまま。なのに、どうして辛くないのだろう。こうして人を助けているとき、どうしてこんなにも暖かく感じるのだろう。

考えてみると、本当に不思議な話だ。私はほとんど何もかもが空っぽなのに、いろいろなものに満たされた翔や亜由美のような人を少しも羨ましくは思わない。あんな風な幸せをずっと求めていたはずなのに。むしろ、その願いが私を過ちに導いたはずなのに。何故、今はこんなにも穏やかな気持ちでいられるのだろうか。

答えにはならないけれど、私は一つだけわかつていることがある。それは、私の望みはまだ繋がっているということ。旅に出るときに決めたこと、感じたこと。それはまだ消えていない。薄れてしまつたかもしれないけれど、それもわずかなものだ。だからこそ人の幸せを妬ましく思わない。そう——世界は探すだけ幸福が見つかるのだから、妬む理由なんて無い。同じではないにしろ、私には私の幸福が見つかる。

そう考えると、私はもしかすると空っぽでもないかもしれない。旅の中で見つけた幸せや希望、新しい願いや望み。そんなものが、むしろ空っぽだった私の中を目一杯満たしてくれているのかもしれない。

もしそうならば、私は他の誰よりもある意味では幸せだということになる。こんなにも自分を暖かいものばかりで満たしている人間はそういないんじゃないだろうか。まあ、いろいろなものを抱えているからこそ人間らしいのかもしれないけれど。

とにかく、私はある種の幸せの中を生きている。失い続け、過ちを繰り返した私でも、こんなにも大きな幸せを掴める。きっと、それが旅の中で人を助ける理由の一つだろう。こんな私でも幸せになれるのだから、もっとたくさんの人が幸せになれるはず。だから、困っている人を助ける。そうして少しだけ、幸福の方へと道を示す。そうすれば、たくさんの人の幸せ——私の願いの一つが連なり繋がっていくのだろう。

翌日。マラソン大会を私たち三人は見ていくことにした。別にすぐさまこの街を立ち去ってもいいのだけれど、わざわざそうする理由も無い。それに、翔がうまくやれるかどうか気になるということもある。

出来るだけ詳細を見たいので、私たちは姿を見えなくして翔のいる場所へ向かう。

マラソンコースは学校の周りで、第一走者は運動場からスタートする。学校の外に出て、大きく周回し、走者を後退しながら学校に戻る。——これは、そのあたりのおばさん同士が話していたことだ。翔は第二走者なので、運動場には居ない。仕方ないので光の扉で移動する。場所は駐車場のようには開けたところ。足元はコンクリート。すでに第二走者は全員待機していた。それぞれが思い思いのことをしている。準備運動する子供や、雑談する子供もいる。だが、

翔は一人で何かを考え込むように、広場の隅——塀の角際に立っていた。背中を塀に預け、真剣な表情で何かを考えている。

一人で深刻そうな表情をしている翔に興味を持ったのか、生徒の一人の少年が翔に寄っていく。

「どうしたんだよ？」

仲がいいのか、その少年は翔の様子に気後れもせず呼びかける。

「チームメイトの仲間割れに困ってる」

「ああ、亜由美ちゃんのことでしょ」

「うん。やばい」

「なにがやばいの？」

「いや、だって、せめて頑張ってもらいたいだろ。ビリじゃないだけでもすごいし。あと、亜由美が可哀想だ。何にも悪くないのに走ってもらえないとか、悲しいじゃん」

「うん、まあ、そうかもな」

自分から離しかけておきながら、少年はまるで興味のなさそうな答えを返す。

「昨日はさ、亜由美以外の奴らにも走ってもらうように頼んだんだ。でも、なんか微妙なんだよな。真面目に走るのか走らないのか。絶対嫌ってわけじゃないけど、面倒くさいって感じ」

「ふうん……」

見るからに無責任な様子の少年。きつと話しかけたときはもっと面白い話題を期待していたのだろう。だが、返ってきた言葉はこれだ。私には少年がすぐにでも引き返そうとしているようにも見える。

「なあ、どうしたら走ってもらえると思う？」

だが、翔は少年の様子に気付いていないようだ。そして、本当に困っているのだろう。でなければ、こんな問いをこんな無責任な少年に投げかけない。

「そんなの、お前が走ればいいんだろ？」

面倒そうな様子を隠すつもりも無いらしい少年。一言だけ答えると、引き下がるように戻っていく。子供とはいえ、適当な答え方に

も限度がある。

だが、翔はまるで素晴らしい回答を得たかのように表情を明るくする。

「そうか、俺が走ればいいのか！」

何かに気づいたように一人で何度も頷く翔。もうそこに、回答をくれた少年はいない。だが、もしもそこに少年がいれば、翔はきつとお礼すら言うのだろう。

やがて、マラソンは始まった。

第一走者はもたもとと走った。先生に怒られない程度、それなりに走った。もちろん早いとは言いがたいし、頑張ったわけでもないだろう。けど、遅くはなかった。明らかに手は抜いているけれど、抜ききっているわけでもないようだった。

きつと、心のどこかに翔の言葉が引っかかっているのだろう。本当に手を抜いていいのか、という疑問。それがあるから、手を抜くことをためらう。

第二走者の待機する場所が近づいてくる。順位は真ん中よりも少し後ろ。第一走者はバランスが取れているのか、先頭も飛びぬけて早いわけではなかった。

そして、たすきは第二走者の翔に渡される。

翔はたすきを渡された瞬間に走り出す。元々スポーツが得意なのか、いいペースで走者を抜いていく。必死の表情が、翔の決意を物語っている。

おそらく翔は、力を限界まで出し切るつもりなのだろう。その気迫で、次の走者を走らせる。直接言葉で説得するよりも、ある意味では効果的かもしれない。

ましてや、第一走者のようにきつと次の走者も心が揺れているだろう。そんなところに限界まで頑張った翔が突っ込んできたら、きつと走らずにはいられない。

翔の走りのおかげもあって、先頭との距離はだいぶ縮んだ。順位もかなり上がった。そこで、第三走者に交代する。ふらふらになりながらも足を休めない翔の姿を見て、第三走者は決意したようだ。翔からたすきを受け取ると、素早く駆け出す。翔ほどの全力じゃないにせよ、真剣に走っているのは明らかだ。むしろ、積極的に次の走者を抜こうと走っている。

第三走者はいい調子で走り、先頭との距離をさらに縮める。順位も上位三位に付いた。

そして、第四走者。

どう説得されたのか知らないが、第四走者はなかなか乗り気だった。第三走者からたすきを受け取ると、全力疾走する。さすがに短距離走そのもののほどのスピードではないにせよ、他の走者より明らかにペース配分が高い。走る距離が半分なのだから、当然といえば当然だろう。

とうとう第四走者は先頭に踊り出る。体力は殆ど使い切っているようだ。少し後ろを走る少年と比べて、明らかに表情が悪い。けれど、トップは守りきったまま亜由美にたすきを渡す。

亜由美は——ゆっくりと歩き始めた。

途端に、後ろをつけていたチームの走者が亜由美を追い抜く。あまり間もおかないうちに、三位、四位と順位が転落していく。

しばらくして、先頭走者がゴールする。が、亜由美はまだ全体の三分の一ほどこしか進んでいない。順位も真ん中より後ろまで落ちている。

次々と亜由美は追い抜かれていく。けれど、走らなかった。どれだけ追い越されても歩き続けた。

次第に、順位は最下位へと近づいていく。最後尾の走者の姿も見えてくる。ゴールまでは後二十メートルほど。どちらが先か、微妙なラインだった。

亜由美は後ろを振り返る。そして、最後尾の走者を確認した。自分を追い越したランナーの数を数えていれば、それが最下位の走者

だということは想像に容易い。

ゆっくりと前を向き直る。そして、何かを決意するように一人で頷く。少しずつ、亜由美の歩くペースは早くなる。次の瞬間にも走り出しそうなほど。

そして、そのペースがさらに上がろうとしたとき。

「――亜由美、歩け！」

翔の声。ゴールの側から投げかけられる。走ろうとしていた亜由美の足が一度止まり、すぐに動き出す。歩調はゆっくりで、どんどん最下位走者との差は縮まっていく。この調子だと、ゴール手前で順位が入れ替わるだろう。

だが、不意に翔がゴール側からコースを逆走するように走り出す。そして亜由美を追い抜き――最下位ランナーの前に立ちふさがる。最低の行為だった。

こんなことは誰も想像しなかった、そして望んでもいなかった。勿論私たちも望んでいなかったし、想像もなかった。

「こら、翔！」

ゴール近くで控えていた教師が翔を怒鳴る。他の教師が翔を連れ戻しにいく。だが、そんなごたごたの間に亜由美はゴールに辿り付く。表情は少しも晴れていない。

ゴールには、他のチームメイトが待っていた。

「翔の奴、最低だな」

第三走者だった少年が言う。亜由美は何の躊躇いもなく頷く。

「けど、俺たち最下位じゃないんだよな」

この言葉には、躊躇いながら頷いた。

このすぐ後、最下位だった走者がゴールに辿りつく。翔は沿道に引つ張られ、教師から説教を受けている。

「翔のやつ、マジ最低」

最下位だった――というよりも、最下位になった少年は呟く。
「うん、ごめんね」

亜由美はすぐさま謝る。が、少年は首を横に振る。

「いいよ、あいつが悪いんだし」
その言葉にも、亜由美は頷いた。僅かに躊躇いながら。

——私たちはそこまで見終わると、目の前にある鏡から視線を外した。

この鏡は、弥生の力と私の力を合わせて生み出したもの。遠くの映像と音を、見つめる者の瞳に映し出す鏡。これがなければ、マラソンなんてもの見ていられない。

「……あーあ、やつちゃった」

安奈が残念そうに呟く。私も弥生も頷いて同意する。そして弥生が、どうします、と口を開く。

「また、助けますか？」

その言葉に、私は同意するべきかどうか迷う。が、結論はすぐに出した。

「いえ、もうこのままで放っておきましょう」

「え、どうしてですか？」

安奈は理由が分からない、といった風に聞き返してくる。

「このままだと、翔くんが可哀想です」

「いいの。自分を犠牲にしたって、何もいいことなんて無いんだから」

私は冷たい言葉を言い放つ。安奈は何ともいえない複雑な表情を浮かべつつ、そうですねとだけ答える。

安奈の反応を見ると、この言葉だけでは言葉足らずな気がする。私は自分の中で言葉を選び、話を続ける。

「それに、これで何もかも終わり、ってわけじゃないでしょ？ 翔は自分で最低なことをやるって決めたのよ。だから、別にいいのよ。酷いことだけど、ある意味では間違いないの。——もちろん、自己犠牲で生まれるものなんて何も無い。けどね、私たちがここであの子を助けてあげても、それを理解してもらうことは出来ないの。

むしろ、理解の邪魔になるわ。簡単なことほど、身にしみるほど自分で体感しないと理解できない。だから、手助けなんていらない。だって、何も考えなくたって解決するんだもの。それじゃあ考えようとする気持ちそのものが起きないわ」

私の言葉を、安奈は思案するような表情で聞く。そして、少し間をおいてからこんなことを言った。

「でも——このままじゃ、翔くんの願いが叶わないと思うんです。むしろ、願いがすっぱり断ち切られちゃった気がするんです。もちろん、断ち切ったのは翔くん本人だと思いますけど」

翔の願い。それはおそらく最下位にならないことそのものではない。ただ、亜由美に歩き続けて欲しかった。そして何よりも、チームで真剣に頑張って欲しかった。それはどちらも、目の前の問題がないがしろにしたいくない、してほしくないという願い。

確かに、翔の願いは叶わないだろう。むしろ、叶いかけた願いを自ら捨てた。どんなつもりかは私には分からない。けど、何となく理解はできる。願いを捨ててまで欲しい現実がある。それがどんなに酷い行為でも。昔の私と今の翔は、きつと同じ選択をしたのだ。

けど——捨てられた願いはそれで終わってしまうのだろうか。真剣に願っていたものでも、簡単に断ち切られてしまうのだろうか。間違いを犯すことが、すぐさま願いの終わりを意味するのか。

私は心の中で呟く。いや、そうじゃない、と。

「安奈、願いはどこまでも繋がっていくものよ。ちよつとやそつとの間違いなんかじゃ、断ち切ることは出来ないの。まるで鎖のように願いは強固よ。もしも過ちの底を見るようなことになっても、願いは繋がる。連なっていくの」

私の言葉に、頷いたのは安奈ではなく弥生だった。

「——願ったことは変わらないから、いつまでも願いは願いで在り続ける。それはあやふやで不確かなものである代わりに、とても強く繋がっていく。特に理由はありませんけど、私もそう思いますね」
弥生の言葉は、私よりもよほど核心をついているように聞こえる。

きつと、昔同じようなことを考えたことがあるのだろう。光と話す能力。安奈との過去。思えば弥生にも考えることは山ほどある。

「……そう、ですか。よく分からないけど、何となく気持ちちは整理できました」

幾らか間を置いてから安奈は口を開いた。

「それに、この旅の目標は昨日話したばかりでしょう？ 本気で生きるっていうことの指標を教えてあげることだって。翔はきつと、本気だったと思うわ。本気で酷いことをした。だったら、あとはこれからの翔次第ね。良くなるも、悪くなるも。——まあ、本気になることを分かったんだしたら、きつと良くなるでしょうけどね」

最後に私はそう締めくくる。安奈も弥生も頷いてくれる。

やがて、私たちはその場所を離れる。次の人助けがあるから、旅の再開だ。この街にまだ助ける人がいるのだろうか。あるいは、隣の町かもしれない。場合によってはもっと遠いかもしれない。ただ、ここに助けるべき人はいない。

「私も、いつか分かりますか？」

不意に、安奈が口を開く。私は歩きながら安奈の方に顔を向ける。安奈は前を向いていた。私もそれに習い、横向けた顔を元に戻す。

「分かるわ。いつか、生きていれば」

後ろの言葉は、意識しないうちに勝手にくつついて出てきた。安奈は何かを感じてくれただろうか。正面を向いたままでは表情も見えないので、推測のしようがない。再び安奈の方を向くと、さっきと何一つ変わらない様子だった。それなのに私は何も不安に思うことがなく、自然と前に向き直った。

こうして私たちは旅に戻った。

願いを繋げる願いのために。

Dear the day

長い旅を続けた。時間でも、距離でも測れない長さだった。それを着実に進んで辿り付いたのはここ——昔、私たちが住んでいた街ここを越えたら、まったく知らない世界に行ってしまう。そんな気分だった。そして越えていこうと思った。

けれど。

私たちの旅は、とうとう終わりを迎えることになった。

「——どうしたの、安奈」

不意に立ち止まった安奈を不審に思い、私は声を掛ける。けど、安奈は何も答えない。じつと何かを堪えるような表情で立ち尽くしている。そう気付いて、私は思い至った。きつと、確かに何かを堪えているんだろう、と。その『何か』の見当ぐらいはすぐについた。

「もう、無理なのね」

私の言葉に安奈は頷く。涙を流しながら。その痛々しい姿に私は胸が痛んだ。安奈は人形。人間みたいに少しずつ駄目になっていくわけではない。蓄積されたダメージが限界を超えたとき、不意に壊れてしまうのだ。きつと安奈は、人形としての自分が壊れてしまったのを感じているんだろう。——自分が人形であるということを知らないまま。きつとそれは理解出来ない苦痛のはずだ。直前までただ疲れていただけの身体が、いきなり言うことを聞かなくなる。それだけじゃない。どこから来るかも分からない苦痛が意識を苛む。

「ここで、旅は終わりにしましょう」

私は安心してもらうため、出来るだけ優しい声で語った。

「旅はもう充分。今日からこの町に住みましょう」

「どうして」

安奈は声を振り絞った。それは抵抗なのかもしれないし、本当にただの疑問なのかもしれない。どっちにしても、私は同じ言葉を答えなければいけなかった。

「貴女が休むためよ。安奈」

その一言で、私たちは旅を終わらせることを決めた。

以前に喫茶店を営んでいた街。そこが、旅の終着点だった。全ての始まりであると同時に、全ての終わりの街。不思議な気分だった。ここで始まったものはたった一つだけのはずなのに、私は何度も終わりを迎えた。そして、今回も。

ただ、今度こそ本当に終わりになるんだろう。ここで安奈は眠る。永遠の眠り。人である時に迎えていたなら、迷わず『死』と名づけられるだろう。それを私と弥生で見届け——その先のことはその時になって考えよう。

今はまだ、安奈のために考えてあげないといけないことがある。

私たちのことなんて二の次だ。

ひとまず私たちは、昔喫茶店を営んでいた建物に住むことにした。ずっと使ってはいなかったけど、売り払ってはいない。だから、まだこの店は私のものだ。

今の安奈に野宿なんてものはさせられないし、病院に預けたりしても無意味。だから迷わずこの店に住むことを決めた。

私たちは安奈を連れて店へと向かう。私が安奈を背負った。きっと私より弥生の方が体力はあるのだろうけど、譲らなかった。これは一つのけじめで、望みだ。

そして目的地に辿りつく。昔と変わらない、質素な外観のままだった。喫茶店の看板はぼろぼろになっているし、下りっぱなしのシッターも錆び付いてしまっている。そういう時間の流れの中で仕方なく変わっていくもの以外は、完全にあの日のままだった。それ

がいいことなのか、悪いことなのかというのは考えなかった。ただ、安心感のようなものが胸の中に湧き上がる。

とにかく私たちは喫茶店の中へと入る。鍵は無かったけれど、私と弥生の力でどうにか開いた。中は埃だらけかと思ったら、案外綺麗だった。しかも、誰かがつい最近まで使っていた様子がある。ただ、使われなくなってから結構時間が経っているようでもある。この所有権は私にあるし、誰かがいる様子もない。危険なことは何もなさそうだった。

弥生に椅子を一つ綺麗にしてもらい、安奈をそこに座らせる。そして私と弥生で掃除を始めた。最優先で安奈の休む場所を片付け、そこに安奈を抱えて移動する。かつては私の寝室だった場所だ。今でも当時のベッドが残っている。安奈は何も言わず、静かにベッドに横たわる。そしてすぐに寝息を立て始めた。きっと、それだけ辛かったのだろう。

安奈が眠ってしまったから、私と弥生で片付けを続ける。思っていたより早く片付けは終わり、夕方にはゆっくりできる時間が出来ていた。

私は――弥生と、これからのことを話し合うことにした。

私と弥生は、安奈が眠ってしまうのを待った。そして店の前に出て、夜の空気の中で話し合う。灯りは街頭と、店前のライトだけ。さすがに暗いだろう、と思って私が点けたものだった。

「――弥生は、これからどうするの？」

私は率直に尋ねる。すると、弥生は躊躇いなく答える。

「安奈ちゃんのことが終わるまで、一緒に居ます。その後は、また自分の旅に戻ろうと思って」

私はちらり、と弥生の表情を伺った。弥生は不思議なことに、笑顔のまま語っていた。

「……かけがえのないものを得られた。私はそう思います。そして

知ること出来た。世界の不幸。そして一人の幸福。だから、そのちよつとしたことを、一人でも多い誰かに知ってもらえたらいいな、と思ひまして。本当に、取るに足らないような、小さな真実を、少しでも多くの人に。――安奈ちゃんと一緒に居て、こんなにも必死になつてやつと知ることの出来た何かを。具体的に、どうとは言えないんですけど。ただ、きつと出会う人々の幸せを願えば伝わるということとは、もう分かりましたから」

「だから、旅に戻るのね」

「――はい」

弥生はしつかりと、旅の中で何かを見つけたようだった。それはきつと、私が見つけたものとはまったく異なるもの。

私は、まだ自分がどうするべきなのか決めかねていた。きつと、安奈のことを考えるので精一杯なんだろう。あるいは、他のことを考えたくないのかもしれない。少しでも長く、安奈のことを考えていたいのか。

「安奈のことは、どうする？」

私はさらに尋ねる。弥生は困つたように笑い、答えた。

「少しでも長く生きていられるようにしてあげたいです。そうすることで、きつと何か見えるものがあるはずです。――やり直すすんですよね？ そのためには、時間が必要だと思います」

「そう……ね。そうかもしれない」

よく分からない。確かに、安奈といろいろなことをやり直すためには時間が必要だ。そのために旅をして、いろいろなものを見た。私と安奈の間にさまざまなものを積み重ねた。

それは、どうして。自分でも分からなくなってくる。確かにそうすべきだと信じたことが、今こうして安奈が眠りにつこうとしてみれば分からなくなってしまう。

私は過ちを犯した。最初の『唯代安奈』にも、その後の数々の『唯代安奈』にも、本当の『唯代安奈』に対しても間違いを犯した。そして、本来できるはずだったこともできずに、ただ繰り返し続けた。

その、本来できるはずだったことは何なのだろう。

私はそれを、二人で生きていくことだと思っていた。『二人だけではなく、『二人』で生きていくこと。さまざまなものを二人で見で、感じて、知っていく。二人だけの時に得られなかったものや失ったものが、次々と見えていく気がした。

旅の中では、確かにそれが正しいと思った。

けれど、今は分らない。結局、今まで私があんなにしてあげたことは、これまで『唯代安奈』に繰り返してきたことと大して変わらなかったのではないだろうか、と。

「……時間が、必要ね」

それは、私の口について出てきた。

確かに必要だった。安奈にとってもそうだし、私自身にとっても。

そうして、私たちは安奈が少しでも長く生きていられるように努力した。弥生の光と話す力で、安奈の体調を詳しく分析する。そして、その結果に合わせた薬を作る。もちろん、人形を直すことはできない。あくまでも、応急処置だ。

それで安奈が長く生きられるなら、いくらでも繰り返す。私はそう思った。

思いながらも考えた。最初の目的。安奈と色々なことをやりなす。そのためには、何をすればいいのか。

そもそも私は何をやりなすしたかったのだろうか。かつての私は過ちから逃げ、また間違えてを繰り返した。安奈の事も、一人の安奈として見てあげられなかった。本当の『唯代安奈』の延長線上で考えていた。それを後悔したのだろうか。だったら、今の私は何をしたいのだろうか。

考えるほどに分からなくなる。私は旅をしたかった。旅をして、安奈とさまざまなものを見た。感じた。そうやっていけば、少しずつでも変わっていくと思った。最初に——本当の唯代安奈が死んで

しまったときにするべきだったはずのこと。それに近づけると思った。

けど、実際に近づいただろうか。そもそも、やりなおすべきことは何なのだろう。あるいは、まだ私は間違い続けているのかもしれない。

——そんな不安が、私の頭の中で暴れまわる。

安奈に少しでも生きていてもらいたい。安奈が生きているうちに、答えを出さないと。そうでなければ、私は何もできない。やりなおせないんだ。

その日は、安奈の体調が大分良くなった。

私と弥生で看病をしていると、

「外に出たい」

と安奈が言い出した。

「駄目よ。そんなことしたら、体に響く」

「でも、ほら」

安奈はゆつくりと腕を持ち上げ、空を指差した。

「すごく空が綺麗だから。なんだか、あの場所みたいで」

あの場所。安奈が言ったのは、この世界に残った唯一美しい場所のことだろう。確かに今日の空はやたらと綺麗だ。何かを吸い込んでいってしまいそうなほど。

私は恐ろしくなって、安奈の願いを聞き入れられなかった。

「駄目。外に行っては駄目。代わりに、窓から外を眺めるのもいいわ。それに、私が空の写真を撮ってきてあげる。だから、我儕言わないで」

「……はい」

「——私の力で、今日の空を部屋の中に再現しましょうか？」

弥生の申し出。確かに、弥生の能力なら不可能ではないだろう。けれど、やはり私は嫌な予感がした。

「それでも、体に良くないのは一緒でしょ？　日差しが強いと、どうしても体力を奪われる」

「そう、ですね」

弥生までも、少し残念そうに呟いた。

分かっている。自分でも、これが過保護すぎるくらい。でも、そこまでしても安奈を守りたかった。一秒でも、一瞬でも長く生きていてほしかった。

「安奈はゆっくり休んで。きっと、良くなるから」

「——はい」

私は最後に嘘を残し、その部屋を出た。空の写真を撮ってきてあげなければいけない。

「弥生は安奈を見てあげて」

「はい」

部屋を出て、カメラ代わりの人形を生み出す。そして日除けに帽子を被り、店の外へ出た。

町を歩きながら、空の写真を撮る。日の輝きに青く染まった空は、色ガラスか何かのように綺麗だった。

「久しぶりだな、皐」

不意に、背後から人の声。聞き覚えのある声に、私は驚いて振り返る。

「水鶏！」

思ったとおり。そこには、あの日別れた水鶏が立っていた。

そして、その傍らには一匹の動物。狐と犬の中間のような姿をした生き物。尻尾が二本あり、その先端の毛は紫色に近い青。他の体毛は、全部金色が白だった。

「……その、生き物は？」

「名前はユグ。人の夢を食べて生きる生き物だ」

「夢食い、って事？」

「もつと恐ろしいさ。夢ごと精神力を奪っていく。心の弱いものが食われたら、たちまち精神の病に冒されるだろうな」

何故、そんな危険な生き物を連れているのだろうか。

「……安奈の感じる痛みは精神的なものだ。ユグの力でもって『食べる』ことが出来なくもない」

「本当？」

私は思ってもみない話に食いつく。水鶏は頷き、話の続きを口にする。

「だが、もちろん痛みの原因がなくなるわけではない。一時凌ぎでしかないし、痛みが完全に消えるわけでもない。また、その結果として精神力を削られる。一時的に精神が不安定になる可能性もある。ただ、痛みが軽くなるだけだ。それでもいいか？」

「——安奈がいいなら。私は是非お願いしたいわ」

「そうか」

水鶏はまるで何かを嘆くような表情で頷く。私はその意味が分からず、ただじつと水鶏を見つめた。

「——空が青いな」

水鶏の一言。不思議と、今日はみんな空のことに注目するらしかった。

「安奈が、この空を見て外に出たいって言ったわ」

「出したか？」

「まさか。体に悪いじゃない」

「そうか」

また。水鶏は嘆くように呟き、項垂れるように頷く。私はなんとなく、その理由が分かった。

呆れられているのだ。私の過保護な様子を。

「……過保護で何が悪いの？」

私は文句をぶつけるような口調で強く言い放つ。

「別に過保護が悪いというわけじゃない」

水鶏はとぼける様子も無く、当然のように返事をした。

「ただ、君が最も悪かったとき、君はとても過保護だっただろう？」
「——そう、ね」

水鶏の言いたいことは分かった。私が過ちを犯していた時代と、今同じ事をしている、と言いたいのだろう。確かに、似たようなことをしているかもしれない。

「ただ、昔と今では一つ違うものがある」

私は、せめてもの反論に呟く。

「何だ？」

「今の私は、自分のためじゃない。安奈のために行動しているの。私という存在が安奈のために生きている。昔は、安奈という存在が私のために生きていた。そこが違うから、あのときのようにはないわ」

「違うないな」

水鶏は一瞬で私の言葉を否定する。

「その考え方は、きわめて単純な、馬鹿らしい考え方だ。前回失敗した方法があるから、その反対の方法なら成功する。そういう無思慮な考え方だ。冷静に頭を使え。今お前の言った言葉の意味を考えると。どうだ、どちらも同じだろう？」

「同じじゃないわ」

「同じだよ。試しに、立場を変えてみるんだ。君と安奈の立場を」
そこまで言われて、やっと私の頭が働いた。

同じだった。完全に、あの私が過ちを犯した日々と。

もしも私が安奈のように命を落としそうになっただけで、安奈が私を救おうとしていたら。そして、私という存在が安奈のために生きていたら。それは安奈からしてみれば、小見原皐という人間が自分のために生きていることになる。

勘違いが原因だ。私が安奈のために生きる。その生き方が、まるで私の中だけで完結するかのように思っていた。そんなはずないのに。もし私がそうやって生きようとしたら、安奈にとってもその生き方が成り立たなければいけない。そうでなければ、私の生き方自

体が成り立たない。

「君の考え方は、あの日のまま変わっていない。きつと、間違えるよ。このままなら。——どころか、すでに間違えている」

水鶏は情け容赦なく痛烈な言葉を浴びせてくる。

「条件が変われば、昔間違いを犯した考え方でも大丈夫かもしれない、なんて甘いことは、現実には起こらない。間違いを犯す考え方というのは、そもそも根本的に欠陥があるんだ。そこを改善しない限り、何をやっても間違い続けるよ」

「……そのとおりだわ」

正しい。それ以上に何も言えなかった。独善的な思考で、勝手に話を進める。——安奈以外の人間に対してはそんなことも無かったはずなのに。

「本当に、そのとおり。結局、旅をして、何も変わらなかったのね。結局間違いを犯す、馬鹿な私のまま」

つい自虐的に呟いてしまう。そうでもしなければ、やりきれなかった。あんなに長いたびをして、安奈の大切な時間を使って。結局何も無かったなんて、空しすぎる。

「——違う」

けれど、水鶏がまた否定した。

「気付いただろう？ 自分が、変わっていないことに。昔はそんなことも出来なかった。今の君は、確かに自分の間違いを間違いだと分かるようになった。それ以上に、何の進歩があるというんだ？」

「でも、結局間違ったわ」

「この世界のどこに間違わない人間が居るんだ？」

「でも間違ったら、悲しい結果が待ってるのよ」

「まだそこまで間違い続けていないだろう？ 誰だって間違いは犯す。だが、深刻な過ちに到達するまで間違え続ける者はそういない。何故だか分かるか？ 周りの人間が、間違いだと教えてくれるからだ。そこで気付く力さえあれば、人は愚かな間違いなんか起こさない。君は持っているじゃないか。深刻な過ちを起こさない力を。そ

れを手に入れられた旅だったんだろう？ それ以上の素晴らしい経験が、一体どこで得られるというんだ？」

——私は、救われた。

そして、また気付いた。

自分が、どうして迷っていたのか。

どうして、安奈にしてあげたいことを思いつかなかったのか。

今までの、私が安奈のためにあるという考え。その間違いに気付いて、やっと分かった。

私から安奈にしてあげることが、何も無いんだ。

安奈の求めるように、手を差し伸べられたら。

それで十分なのだ。

「ねえ、水鶏」

私は尋ねる。そして驚いた。自分の声が、涙声だったことに。

「ありがとう」

私はお礼を言った。そして、顔を上げていられなくなった。そのまま俯き、しゃがみこむ。体中に付きまとっていた鎖や錘が、すべて取り払われたような気分だった。

私は水鶏をつれ、店へと帰る。

「誰かが誰かのために——それが正しいと、思ったのよ。馬鹿な私は」

勝手に話す私。自分でも、はつきりと口にして気持ちを整理したかった。

「最初から、人はみんな一人きりなのよね。二人一緒なんかじゃない。私と安奈は二人じゃなくて、『私と安奈』だったんだわ。だから、私と、安奈。それぞれが生きていかなければいけなかったのよ」私の言葉を、水鶏は静かに聴いていた。否定も反論も入らないことに安心して、話を続ける。

「やりなおそう、って最初に決めたときから、もう勘違いしてたん

だわ。やりなおすつてのは、もう一度最初からはじめるつてこと。決して、もう一回別のことを試すつて意味じゃない。それが分かっていたのよ、私。だから、安奈に何かをしてあげようと必死になっていた。やりなおして、新しい別の何かをしてあげようとした。でも、そんなことしなくなつて、やりなおすことは出来る。むしろ、やりなおした上でやるべきことは、一つだけだつた。私が私として、安奈が安奈として生きる。そんな当たり前のことを、ただ普通にこなせばよかったのよ。——安奈が倒れるまでは、考えなくても出来ていたのに。間抜けな話ね。考え始めた瞬間から、上手く出来なくなるなんて」

「人間、誰しもそんなものだ。ただ、君みたいに気付くことを知つた人は少ない」

「ありがとう、水鶏」

私はまた、この黒尽くめの青年に礼を言つた。夏なのに、律儀にあの格好を守っているのが奇妙で面白くもある。が、きつと何かこたわりがあるのだろう。そう思つて、服装のことは何も言わずにおいた。

やがて店に帰り着く。私は水鶏もつれて、安奈の休む部屋へ上がる。

「——水鶏、さん？」

安奈は水鶏に気付く、驚いたような声を発した。そのまま、水鶏は私にしたとおりの説明を安奈にも繰り返す。ただし、細かい部分はごまかして。安奈は自分の痛みの原因を知らない。その原因は、あまり教えたくはない。だから、水鶏もはっきり断言するようなことはしなかつた。

説明の間、傍らでユグというらしい生き物がちょこちょこと動き回っていた。深刻な雰囲気自然と和む。こんなに落ち着いた感覚は随分と久々に味わつた。たとえ一瞬だけとはいえ、十分に嬉しいものだ。

「——どうする、安奈」

水鶏は説明を追え、安奈に選択を迫る。

「……副作用、とかは無いんですよね？」

「少し精神が不安定になるだけで、肉体的に悪影響は無い」

「なら、お願いしたいです」

話はまとまった。水鶏は足元をうつつくユグを拾い上げ、安奈の目の前に掲げる。ユグは状況を理解でもしているのか、突然大人しくなる。そして、まるで安奈を見つめているようですらあった。

「ユグ。彼女の精神の中で、特に大きな『痛み』の部分を食べてくれ」

キィ、と甲高い鳴き声で答えるユグ。続いて、ユグの瞳が僅かに赤く光る。光は靄のように瞳の中で揺らめき、そして消えていく。そしてまた光が現れ、消える。それが何度も繰り返された。

数分間、そんな状態が続いた。最後に光が消え、沈黙のまま光が現れなくなる。食べ終わった、ということだろう。

「――終わりだ」

水鶏が行って、安奈から離れる。私は間髪入れずに安奈のそばに寄っていく。

「安奈、調子はどう？」

私の問いかけに、安奈は笑顔で答えた。

「――はい、だいふ楽になりました」

安奈は呟き、そのまま、私の手を握ってきた。

「でも、よく分からないんですけど、すごく不安で……泣きたく、なっ」

気付かないうちに涙が流れていた。私は握られた手を握り返した。そして、祈りをささげるような格好で安奈の手を額に当てた。

「大丈夫。安奈」

安奈は、無表情のまま涙を零していた。私の言葉に答えるかのように、体を起き上がらせる。楽になったとはいえ、実際に体を動かすのは辛いはずだ。それでも、体を起き上がらせて、涙を流しながら笑う。

「ありがとう、臯さん」

私はそのまま、安奈を抱きしめた。不安が爆発したのか、途端に安奈は泣き出した。子供の癪癪のように、大声で。私はそれを抑えるでもなく、守るでもなく。ただ一心に抱きしめていた。

気がつくと、水鶏も弥生も居なくなっていた。私は安奈が落ち着くまで一緒に居た。安奈が眠るのを確認して、私も眠った。

次の日になっても、弥生は帰ってこなかった。きつと、すべて終わったんだろう。弥生にとって。

弥生は安奈が好きだった。

けれど、もう安奈は弥生のことを好きだとは言わない。

そして、私はもう答えを出した。安奈のこと。これからのこと。弥生のことから、光に訊けば私が答えを出したことぐらいすぐに分かるだろう。

だからなのだろうか。

数日間、安奈の体調はまた悪くなった。ただ、痛みや苦しみはかなり軽減されているらしい。それでも、体を起こせないほど安奈は弱っていた。

そんな数日を過ごして、また安奈の体調は回復した。

私が安奈のベッドの傍らで目覚めると、もう安奈は体を起こして外を眺めていた。

「——また、空が綺麗です」

安奈は呟く。私はそれに笑顔で答える。

「こんな日は、外に行きましょう」

もう、変なことを言ったりしない。

私は車椅子の人形を作り、それに安奈を乗せた。安奈の思うとおりに動いてくれるように作った。安奈は気に入ったようで、しばらく店の前で遊んでいた。

日が高くなる前に帰りたかった。私は安奈を急かすように誘い、近くの公園にでも行くことにした。

「――空が、本当に青い」

安奈は呟く。今日の安奈は、何故か妙に大人びて見えた。沢山の出来事を知ってきた、大人のような目。私はその目を綺麗だと思った。

「そうね、綺麗ね」

私はそう言ってから空を見上げた。

公園には、先客が居た。

弥生だ。

「海、行きませんか？」

弥生は言って、光を集める。私に扉を作らせるつもりなのだろう。「どここの海よ」

私は呆れたような口調で、笑いながら言った。どうせ、あの海に決まっている、と思いながら。

「臯さんは、知っていますよ。三人で行った町の海です」

やっぱり。私はついおかしくなって、笑い声を上げてしまう。弥生も同じように笑った。事情が分からない安奈は、ただ私と弥生の顔を見比べるだけだった。

「――安奈ちゃんも、海に行きますか？」

「うん、行きたい」

安奈は笑顔で頷いた。

「あとね、弥生ちゃん」

そして、誰も考えていなかった言葉を続ける。

「もうこんな仲良しなんだから、安奈って呼び捨てにしていいい？ 私、その方が嬉しいから」

弥生は、驚いたような顔をした。『安奈』と呼び捨てにする呼び方は、弥生と『唯代安奈』が出会った頃の呼び方だった。

弥生の瞳が潤む。涙は落ちない。

「ありがとう、安奈」

「うん、どういたしまして」

扉を作り、あの日の海に来た。海風が心地いい。安奈の体に障らないか心配だ。けど、安奈が決めたこと、望んだこと。それを封じてまで長く生かす権利なんか、誰にも無い。生存することと生きることは、また別のことなのだから。

砂地の上でも、私の作った車椅子の人形はよく動いてくれた。砂に足をとられながらも、ゆっくりと進んでいく。砂が噛んで止まるようなことは無かった。

「ねえ、二人はここでちょっと止まって」

不意に安奈に言われ、立ち止まる。弥生も同じだった。そのまま安奈は一人で進んでいき、距離をある程度離れたところでこちらを振り返った。ちょうど、海を背にする形となる。

「——目覚めて最初に会った人は、風変わりな瀏の広い帽子を被っていた」

安奈が話し始める。私も弥生も、何のことだか分からない。

「紅茶とクッキーを味わった。明日も喫茶店に行こう。コンビニ弁当を買ったら、手抜きだね、と笑われた。うん、手抜き、と私も笑った。その周りは、なぜかカップルばかりだった」

次第に、何を言っているのか予想がつき始めた。でも、まさか。そんなはずは無い。安奈が――今の『唯代安奈』が、あの時のことを覚えていないはずが無い。

「喫茶店でまた紅茶を飲んだ。帰り際にキスをした。英語のテストの勉強はしなかった。友達に告白された。三人で旅行に行った。バスで海まで行った。二人でキスをした。次の日は、木のおもちやの車がついているお菓子を買った。やきもちも妬かれました。夕方になつてやっと帰り着いて、私は木の車をテーブルに置いて眠った。そのまま、眠った」

間違いない。安奈は、確かにあの時のことを語っている。

一つ前の『唯代安奈』が経験したことを。

「これで、あつていますよね――」

安奈は笑顔で、確証を得るに十分な一言を呟く。

「――セピアさん？」

信じられない。

安奈が、あの頃のことを覚えているなんて。

「ええ、安奈、当たっているわ。でも――」

「どうして、『私』が覚えているのか」

私は頷く。何がなんだか、さっぱり分からない。自分で作ったはずの人形だ。それも、何十年も一緒にいた。それで分からないことがあるなんて、想像もしていなかったことだ。

「唯代安奈っていう名前で共通して語られる人形たちは、皆死ぬ前にすべての記憶を思い出していたんです。死ぬ直前に、すべての記憶を。その上に自分の記憶を重ね、また次の『唯代安奈』に託す。セピアさんに、見つけてもらうために」

「見つけて、もらう」

何を言われているのか分からない。見つけるとは、何を見つけるのか。記憶を次の『唯代安奈』に託すとは、どういうことか。

「……本来の唯代安奈は言いました。理を歪めないためには、『ただ、『私』が存在してはいけない』んだと。それはつまり、記憶を失うということの意味していました。唯代安奈らしさを形作る多くの記憶を封じ、消えたように見せる。そうすれば、『死んだはずの唯代安奈』は地球上に存在しなくなる。だから、理を歪めない。そして、人形としての死を迎える直前に記憶を思い出すだけなら、その短時間の間なら理は歪まない。そうして記憶と人格が積み重なりながら、唯代安奈の心は変化していきました」

「どうして、そんな回りくどいことをする必要があったの？」

私は問いかける。知りたかった。話から察するに、安奈が最初に死んだときからこの計画は続いていたのだ。ということは、私が心の底から愛した人の策であるはず。きっと、何か意味があるんだろう。そう考える。

「見つけてほしかったんですよ」

安奈は繰り返す形になった言葉を、はっきりと口にした。

「私は、セピアさんに見つけてほしかった。自分という一人を。唯代安奈という、何度も名前を共通にして、魂も共通にしながら生まれる別々の一人一人を。はっきりと、セピアさんに見つけてほしかったんです。そのためには、セピアさんに色々なことを経験してもらわなければいけなかった。それが適うよう、『唯代安奈』は死ぬ直前、次の自分の心を新しく形作って死んでいく。もちろん、新しい心以外はすべて封印して。それを繰り返すことで、唯代安奈はセピアさんに働きかけていたんです。自分たちを見つけてくれるように。——ほら、どの唯代安奈も性格が微妙に違っていましたよね？セピアさんの術なら、性格に変化は出ないはずなのに。原因は、有機物人形という特殊な媒体だからという理由じゃない。私が、私自身を少しだけ作り変えていたんです」

確かに、ずっと疑問だった。私は人形の体しか操っていない。それなのに、毎回『唯代安奈』は性格が違った。

「ところが、一つ前の私は失敗しました。セピアさんが、私を見つ

けてくれたと勘違いしたんです。一人だけ、セピアさん以外の人も好きになってしまった人形だから。弥生ちゃんというイレギュラーが存在したから。少しだけ、判断を間違った。多分、希望的観測でセピアさんの反応を図ってしまったんでしょう。セピアさんが私という個人を見つけてくれたような微笑を浮かべてくれた。でも、それは本能的なものに過ぎなかった。はつきりと、私たち多くの『唯代安奈』それぞれを見つけたわけじゃなかった。なのに、勘違いして、記憶を封印せず、次の心に何の処理もしないまま終わってしまった。危うく願いが叶わなくなるところでした。——が、幸いにも私はまた生き返った。水鶏さんの力で。結果、私はすぐにすべての記憶を封印した。心を作り変える暇なんてありませんでした。だから、私は今までのどの安奈よりも特徴の無い、普通の安奈になった」

確かに、今までの安奈の中で一番普通の子が今の安奈だ。どの安奈にも、どこか面白いところがあったのに。何故か、この安奈だけがやたら純粹で、ごく普通の女の子になっていた。

「まあ、結果としてそれは成功だったんですが。失敗が上手く働いて、こうしてセピアさんに私たちを見つけてもらうことが出来た。すべての一人一人の『唯代安奈』を覚えていてもらえる。——もう、唯代安奈としての願いはすべて叶いました」

すべて叶った。良い意味以外に何も無い言葉に、私は嫌な予感を覚えた。

「ありがとう、弥生ちゃん。偶然だけど、貴女と出会ったことで私たちは報われました。貴女という人のお陰で。すべての私は、一人の私が貴女を愛したことを誇りに思います」

「そう、ですか」

弥生は複雑そうな表情だった。急に聞く話としては、これはあまりにも異様な話だ。自分と両思いの『唯代安奈』は、この唯代安奈の中のたった一人だけ。どう受け止めて良いのか、分からないのだろう。

でも、弥生は笑顔を見せた。

「ありがとう——安奈」

声だけは、震えていた。

「……セピアさん。どうしても、伝えたいことがあります」

「お願い」

私は、安奈の願いをさらに願った。どうしても、それを聞いておかなければいけない気がした。——きっと、安奈はもう眠ってしまったのだから。

「本当の唯代安奈は、今でも貴女のことを愛しています。この世界と引き換えに少しでも、貴女と一緒にいたい。記憶を消す瞬間、本当にそう思いました。——ですが、今は違います。沢山の私が生まれ、様々な貴女との記憶が増え、積み重なった。そのどれもが幸福に満ちていて、本当に良かった。どの私も『唯代安奈』なのだから、みんな、どの『唯代安奈』のことも自分のことのように大切に思えるんです。だから、まず一つ」

安奈は言葉を区切り、一言呟く。

「ありがとう」

私にとって、そのありがとうはどこまでも深く暖かい意味があった。世界中の人々に心から感謝されるよりも、よほど価値のあるものだった。

涙が流れているのは当たり前だろう、と思った。自分では、もう何がなんだか分からない。どれだけ泣いているのか。多分、顔をぐしゃぐしゃにして泣いているんだろう。それぐらい、嬉しいことだった。

「そして、次に私たち、人形の『唯代安奈』のことです」

十分な間を置いて。安奈はまた話し始める。

「私たち『唯代安奈』は、いつも幸せでした。何度生まれても、貴女に愛され、素敵な日々を生きて、一月にも満たない最高の人生を何度も経験しました。これ以上の幸福が、世界のどこを探したところで見つかるものなのか。——本当に、ありがとうございます。私たちは、みんな貴女のことを愛していました。そして眠りににつき、

人格と記憶だけになった今でも、確かに貴女のことを愛しています。それはまるで――」

不意に、海鳴りの音が静かになる。

「――母親のように」

その一言がやたらはつきりと聞こえてきた。

「私たちはみんな、今では貴女のことを恋人のように、また、同時に母親のように愛しているんです。幸福な人生をありがとう。短かった人生をありがとう。生んでくれてありがとう。私たちはみんな、同じように、それぞれ感謝しているんです。だから、全部を合わせて、一言だけ言わせてくれませんか？」

「――うん、言つて。お願い」

二人して願ひあうなんて、なんて面白いんだろう。

「ありがとうございます」

二度目の感謝。私はもう、顔を上げていられなかった。体から力が抜けるようだった。すべての張り詰めていたものが蒸発して、すっかり綺麗になった気分。でも、涙は止まらない。

確かに私は、どの安奈も愛していた。それぞれの安奈を、まるで恋人のように、同時に娘のように。『唯代安奈』はみんな、私の大切な恋人で、家族だった。理屈も何もかも飛び越してしまう愛情があった。

同じように、どの『唯代安奈』も私のことを愛してくれた。

こんなに幸せで、報われることがどこにあるのだろうか。

こんなにも、生きていて良かった、と思えることが他にあるのだろうか。

「……もうそろそろ、記憶を持ったまま存在できる限界です。そして、体の限界。長かった私たちの人生。それも、今日で終わるんです」

安奈は言いながら、車椅子の人形から立ち上がる。きっと、立ち

上がるのもつらいだろう。それでも、しっかりと二本の足で砂を捉えた。

私は涙を拭いて、しっかりと安奈を見据える。

これからきつと、安奈は選ぶ。自分の生きる人生を。どう生きていくか。どう死ぬか、ではない。生きている限りの自分の行動を選ぶはずだ。

私は、それに付き合いたい。

最後まで、安奈に生きていてもらいたい。

「ですから、最後に一回だけ、遊びましょう。二人とも」

「うん、分かったわ」

「はい、私も、遊んでいいのなら」

安奈の呼びかけに、私も弥生も答えた。

「ルールはかんたん。いちばんさいしよに、海まで走っていったひとのかち」

頷く。私も、弥生も。

「それじゃあ、よーい……」

私と弥生は走り出す構えをした。安奈も、ゆっくりと海に振り返る。

「——スタート！」

三人は、一緒に走り出した。

海に近い安奈は、体力で私たちに負けている。どんどん距離は縮まっていく。

けれど、安奈は全力で走りぬけた。

海まで。

——一番だ。

誰よりも先に、海まで走りぬけた。

「——かちました！」

勝ち誇るように、安奈はこっちを振り向いた。私はその体を強く抱きとめる。

「二番……っ！」

今にも泣いてしまいそうで、声は震えて掻き消えそうなほど小さい。

けど、安奈の耳元には届いたようだった。

「おめでと。皐」

最後に言葉を発したのは、きっと唯代安奈。

そのまま、安奈の体から力が抜けた。がくり、と突然重くなる。直後、人形を形作っていたものが風化し、きらきらと光る砂になって崩れ去った。

今日の安奈は、最後まで眠ったりしなかった。

これが、私の生きてきた中で最高の一日。
敬愛するような、そんな気持ちで。
いつもこの日を思い返す。
一人で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9613e/>

Imitation Life

2010年10月8日14時24分発行